
バカとテストと召喚獣 ~ 異常者と転生者と? ~

たぬく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 ～異常者と転生者と？～

【Nコード】

N9602S

【作者名】

たぬく

【あらすじ】

雄二と翔子の幼なじみである五十嵐 達也。

彼がAクラスの代表になった事でイロイロと物語の歯車が狂っていく。

・・・とか言いながらも原作沿いだけど（汗

あ、ごめんなさい。クラス間違えました(前書き)

初めましてたぬくと申します(^o^)/

最近、このサイトに登録した初心者です。

未熟者なので是非感想でのご指導下さい!

では、どござ(^o^)/

あ、ごめんなさい。クラス間違えました

ここは文月学園。

科学とオカルトによって開発された召喚システムを取り入れた試験学校である

そんな学園の立派な校門の前に俺はやってきた。

・・・とまあ客観的な冒頭だが、実は新二年生であつたりする

「おはようございます。鉄人先生」

「五十嵐、相変わらずお前は・・・まあいい。
遅刻ギリギリだぞ」

ため息を着いたいかつい男、西村先生、通称鉄人に一通の封筒を渡された

ちなみに鉄人というあだ名は先生の趣味がトリアスロンだから、
という理由らしい。まあ、そんな訳で俺もそれにあやかつてる訳だ
けど。

「？翔子からのラブレターですか!？」

「はあ・・・クラス結果だバカ。速く行け。さもなければホームルー
ムに遅れるぞ」

またこの学校は一年、二年の終わりにおける振り分け試験の結果に
よつて新学年のクラスが決まるのである。

「・・・Aか」

ちなみにA～Fまでのクラスがありテストの成績順に振り分けられるのだ

「翔子は？」

「知りたいなら早く自分で行って確かめろ」

俺の問いに鉄人は頭をボリボリとかきながら言った

「了解」

「失礼します」

「あ、五十嵐君来ましたか」

最早ホテル並の教室に入ると前に立っていた女性、高橋女史が声をかけてきた

「はい。自己紹介は？」

「あなたからです」

「てことは？」

「西村先生はおっしゃっていませんでしたか？
ご想像通りあなたが首席です」

・・・ああそうですか

「それじゃ初めまして、俺の名前は五十嵐 達也。
このクラスの代表を務める事になった。
呼び方は代表でも五十嵐でもどちらでも良い。
一年間よろしく」

至極当然のような自己紹介にクラスが盛り上がる（主に女子）

ん？あれは・・・翔子。

やっぱりAだったか。

よかった

翔子に向けて笑いかけると、あっちも笑顔を返してくれた。

『！今私に笑顔を！？』

『違うわ！私によ！』

『五十嵐君、笑顔も素敵』

・・・う、そんなに俺って変な顔かな？

騒がれるほどじゃないはずなんだけど・・・

「静かに。」

高橋女史の声で騒がしくなりかけた部屋が静まる

「改めましてこのクラスの担任になります高橋洋子です。

まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、その他の設備に不備のある生徒はいますか？」

高橋女史は生徒達を見回すが、手を挙げる者はいなかった。

・・・まあ、これだけあって不満がある奴がいたら少し感覚がおかしい気がするけど。

「無いようなので安藤さんからお願いします」

「はい。安藤陽子です。趣味は・・・」

て言うか俺っていつまで前に立たされてれば良いの？

悪行をしたみたいで気分悪いんだが・・・

「私は木下優子。得意科目は現代文。Fクラスの弟と似てますがあまり間違えないでほしいですね。

一年間よろしくお願いします」

「・・・霧島翔子。得意科目は特に無い。一年間よろしく」

「一年の最後に転校してきた工藤愛子だよ。得意科目は保険体育か

な。

「一年間よろしくね」

「僕の名前は久保利光だ。得意科目は特に無い。

一年間よろしく頼む」

安直な自己紹介を各々が終えていく。

はっきり言って自己紹介より実際関わった方が親交も深まる訳だし、名前言うだけでも良いんだよな。

時間は過ぎ……

「えっと俺の席は……」

「こつちよこつち」

HRを終えて高橋女史が教室を出た後、自己紹介も終わったので辺りを見回し席を探していると声がかかった。

いかせん、かなりの広さの為予備の席の割合も少なくは無いのだ。

「えっと君は木下さんだったっけ？」

「ええ。木下優子よ。

よろしくね、代表」

「五十嵐達也だ。

あゝ、木下さん。さつきはああ言ったが代表はやめてくれ俺に代表つてのは合わない。翔子の方が全然似合う」

木下優子（以下優子）は俺と翔子の顔を交互に見てから苦笑いして頷いた。

「まあ自覚があるんだから良いけど、笑っちゃったのは・・・お仕置きが必要かな？」

「〜 @ # つ!/?/ /」

耳元でそっと囁いてみる。女の子はこつこつこの苦手なんだよなあ

ww

「・・・達也。それ以上は許さない」

「分かってるって」

とりあえず冗談だつて事を木下さんにも伝えておく

「そつといえば五十嵐君は霧島さんと知り合いなの？」

さつき名前で呼び合つてた事を言いたいのか？

「ああ、幼なじみだよ。幼なじみ。小学生の時からのな」

『なんだあゝ』

『よかつたのかな』

『いや、まだ分からないよ〜?』

???

なんで周りの人も一斉に頷いてるんだ?

「えつと五十嵐君」

「君は・・・工藤さんだよな」

「うんうん。ずばり聞きたいんだけど霧島さんと五十嵐君は付き合ってるの?」

そうだったら良いんだけどなあ〜（願望）

まあ、いや

「いや、だから俺達はただの幼なじみだって」

「そうなんだ」

ホッと達也達のやり取りを見ていた（女子）生徒達が安堵のため息をつく

「それじゃあボクの事、愛子って呼んで?ボクも名前で呼ばせてもらうから」

な、なんだと!?

なぜこんなところに需要の高いボクっ娘がいるんだ!?

いや落ち着け、KOOL・・・COOLになるんだ!

ここは好印象を狙って笑顔で、よし、頑張れ俺！

「ああ、よろしくな愛子^{ニム}」

「う、うん。よろしく」

引かれた・・・だと？！

「・・・達也。話がある。着いてきて」

「え、ああ。わかった」

「で？話って何だ？」

「・・・浮気は許さない」

「ま、待て！だから雄二がつ！？目が、目があああああ！？」

『・・・・・・・・』

『・・・・・・・・』

『・・・・・・・・』

「えつと大丈夫かなあ？」

「きつと大丈夫よ・・・多分」

廊下から聞こえてくる声にどう反応して良いか困るAクラスの面々であつた

「え、では五十嵐君。自衛隊の存在が違憲であるか国会で議論されている理由とあなたの意見を言つて下さい」「はい。まず自衛隊は日本国憲法九条の『戦争の放棄、戦力及び交戦権の否認』において国の戦力に当たらないかと言つ議員の意見があるのが議論が行われている理由で、

私の意見としては、自衛隊は元々憲法の改正を求めたアメリカが創設を要求した警察予備隊が原点であるからして、また最低限の自衛

目的の戦力まで憲法では否認していない。この二つから自衛隊は違憲では無いと判断します」

「なるほど。筋が通っている素晴らしい意見ですね。確かに自衛隊の原点である警察予備隊は朝鮮戦争の期間中にアメリカが創設を要求しました。」

皆さん、この点はなるべく覚えておくように。
では、五十嵐君着席して良いですよ」

「はい」

社会担当でもある高橋女史に着席を促されて自分のリクライニングシートに座る

「・・・流石」

「どうも」

地獄の5分休みを終え、俺達は一時間目の授業に入っていた。
なにも初日から勉強しなくても・・・

「そういえば達也。何かFクラスがDクラスと試召戦争を始めるって噂聞いた？」

「・・・あの間に聞けたと思うか？」

そう俺が聞くと優子は苦笑いしながら首を横に振った

あの間については、皆さん分かってくれると嬉しい

ちなみに優子が俺を名前で読んでるのはあの間にあたるモノを終えた後に愛子と同じように頼まれたからだ。

その後、また数分間目が見えなくなったのは言うまでもないだろう
あ、あと久保にも改めて自己紹介された。
なんでも彼は振り分け試験で学年3位だったらしく、お互い頑張ろうという事だった。

あ、そういえば久保君で思い出したけど姫路さんはどうしたんだろう？

彼女もAクラスレベルだった気がしたんだけど・・・

休み時間に翔子に聞いてみるか

「Fクラスが・・・ねえ」

雄二の事だ。翔子がいる訳だし多分このクラスを狙ってるんだろう。しっかし、進級早々油断しているDクラスなら倒せるかも知れないけど、狙われているとわかって警戒してるクラスを倒すのはFクラスの戦力的に難しいんじゃないのか？まあ、雄二がどう動くか見物ってところかな？

「どうしたの？気になる事でもあった？」

「いや・・・今はとにかく授業に集中しよう。ウチに仕掛けてきたらその時はその時だしな」

高橋女史がチラチラとこちらを見ていたので、先に話を終わらせて授業に意識を移す。

その時って言っても、ウチに仕掛けてくるはずもないって油断している奴等がいるってのは修繕しなきゃ駄目な点かもな。

昼休み・・・

「そういえば翔子。姫路がどうしたか知ってるか？」

「・・・浮気は許さない」

「いや、待て違っただって！聞くだけだから！スタンガンはやめて！本気と書いてマジで！」

必死に説得してどうにか右手に持ったスタンガンを収めてもらおう。つてか翔子はどうやってあんなもの調達してんだ！？

「・・・絶対？」

「ああ絶対だよ」

「・・・なら良い。姫路さんは振り分け試験の時に体調不良で早退したみたい」

「へええ。それは運が悪かったな、彼女も」

あゝ、姫路さんは見てるだけで癒されたんだけどな

「・・・達也。浮気は許さない」

「ま、待て！なんで心が読めるんだ！？じゃなくてスタンガンは危険過ぎるって？ぎゃあああああ！！」

薄れゆく意識の中で翔子が嬉しそうな笑みを浮かべていたのを最後に視界に入れて、俺の意識は無くなった

「ん・・・」

知らない天じょ・・・今朝見たような天井？

「・・・起きた？」

「ああ・・・」

翔子にスタンガンで気絶させられたんだっけ
しっかし、なんでこんなに顔が近いんだ？

・・・まさかこの頭の下の子らしいモノは！？

「膝枕はイロイロな意味でマズイって！！」

バツと足と上半身を前に動かしてそのまま、前方に着地する

「・・・達也。また寝て？」

「待て！疑問形なのにその手のスタンガンはおかしいっぎゃあああああ！！！」

誰か助けて……

「ん……は！三度同じ手はくわないぞ！って愛子？」

「うん。凄い反応だったよ」起きた瞬間頭の後ろに感じた柔らかいモノに反応して、瞬時に立ち上がり間合いを取る

「なんでお前が……？
翔子は？」

「むっ。ボクじゃ嫌だったのかな？」

「いやそうじゃなくてだな！翔子に気絶させられたからってっきり……」

「フッフ。そんなに慌てて訂正するなんて可愛いなあ」

う……嵌められただと。

あ、でも可愛いつてのは嬉し・・・ゲフンゲフン男はカッコイフて言われなきゃ駄目なんでい！

「えつと翔子は？」

愛子はからかうのを失敗したからか少し頬を膨らまして俺の背後を指差した。

「イケメンは公共の財産です！！独り占めは良くありません」『私達にも祝福を！！』

『イケメン万歳！！』

『幼なじみだけが優遇されるのは不平等よ！！』

『この世界に生まれてよかった！！』

「・・・・・・・・」

対峙する翔子と般若のお面を被ったクラスメイト達

翔子の手にはスタンガン

クラスメイト達の手には大振りの鎌

「えつとお・・・なあ愛子」

「ん？何かな？達也君」

「聞きたいんだけどさ、あれ全員うちのクラスの奴らだよな？」

「そうだね」

「ここってAクラスだよな？」

「AAA団って言うチームなんだって」

「一番前の般若って確か佐藤さんだよな？」

「うん。多分そうだよ」

初見はメガネで清楚な女性だったんだけどなあ（遠い目）

・・・一言言いたい。

みんな・・・馬鹿ばっかです

「・・・達也は誰にも渡さない」

「そんな事を言っただけで独占するなんていけません」

「・・・達也はメガネっ娘は趣味じゃない。だから幼なじみも含めて私が有利」

「・・・もう嫌だ。これは夢なんだ。愛子、俺寝るから」

「あ、うん。それならボクが膝枕してあげる」

それから俺は夢が早く覚めるようにと神に祈ってから意識を落とした。

数分後達也の悲痛の叫びが学園に響いたのは言うまでもない

・・・お腹減ったよ。パトラッシュ

結局昼食も採れなかった達也君だった

あ、ごめんなさい。クラス間違えました(後書き)

お読みいただきありがとうございます。

亀更新になります。精一杯がんばりますので温かく見守って下さると幸いです。

異常者、転生者に会う（前書き）

えつと第2話です。

1話同様、文法又は漢字が間違っていたなどの指摘の感想くると嬉しいです。

ちなみに異常者はいくまでもめだかボックスとは一切関係ないイレギュラーなので悪しからず。

異常者、転生者に会う

「ではこの問いを・・・」

ピンポンパンポン

あの後昼食も摂ることも出来ず、そのまま午後の授業が始まり、残る授業はこの数学一つになっていた。

数学担当でもある高橋女史が教鞭を振るい、適度な緊張感の中、授業が行われている。

『船越先生、船越先生』

『吉井明久君が体育館裏で待っています』

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の話し合いがあるそうです』

「「「・・・」」」

「そんな・・・吉井君。それなら僕を・・・」

なあ、笑っちゃいけないの？無言になる意味なんてない！皆、笑おうぜ！

なんて考えてみるが、とても言えるはずがない。

あ、ついでに後の人はスルーします。

俺の辞書に同性愛者なんて文字は無い！

「……この問いを久保利光君、答えて下さい。
久保君!？」

「は、はい!えつと……」

……吉井明久だっけ?

確かFクラスにそんな奴がいたような気がする

つて事は召喚戦争の戦略かなんかだったのか。

だがまさか……あの船越先生を呼び出しとは……。

雄二にも面白い味方がいるみたいだな。

吉井明久か。覚えておこう

「優子、ちよつといいか?」

「え?今、授業中なんだから短くしてね」

一応隣の席(という名のリクライニングシート)なので、優子は少し勉強の手を止めるところこちらに用を仰いだ。

「ああ。えつとFクラスが今召喚戦争をDクラスに行ってるんだよな?」

「ええ。今の放送もそれならみのはずよ。でもそれがどうしたの?」

「確かお前の弟はFクラスだったよな?それとなくて良いからあいつらの戦力を聞いてくれないか?」

「……？別に良いけど私達に戦争を仕掛けてくるなんてー」

ありえない。訝しむように優子はそこで言葉を切った。

「そんな油断からは何も生まれない。備えあれば憂い無しだろ」

それだけ言っただけで俺はフツと笑った。

優子はそれに数秒考える姿勢を見せると仕方ない、と頷いた。

「ありがとう。それじゃ、よろしく頼む」

「ええ。わかったわ」

さて、そろそろ授業も終わるし下見にでも行ってみますか。

「にしても召喚戦争ね」

Fクラスに向かう途中、Dクラスへの道を塞ぐ連中と鉢合わせた。

他クラスからの干渉は戦争中は無しになっているので、武力行使することも出来ずその場で見学することにした。

「Fクラスが来たぞ！例のアイツだ！！」

Dクラスの方から一人の生徒の声が廊下に響く。
その声を聞くや否や廊下を通せん坊していた生徒が教室内に走って
いく。

・・・これじゃあFクラスの戦力がDクラスに簡単に入れるじゃん
そこまで追い詰められているって事なのか？

・・・まあいや

Dクラスの生徒がその場を後にした理由を考えてみたが、すぐに必
要無い思考だ、と振り払った。

俺はそのまま歩を進めてDクラスの教室に足を踏み入れた。

「Fクラス、姫路瑞希。Dクラス代表に現代国語で召喚戦を申し込
みます！」

「は、はあ。どうも・・・」

『試獣召喚!!』

現代国語

Fクラス 姫路瑞希

339点

VS

129点

Dクラス 平賀源二

「え？あ、あれ？」

「う、ごめんなさいっ」

姫路の召喚獣は素早い動きで一撃の下、Dクラス代表の召喚獣を一閃した。

『Dクラス代表平賀源二 討伐!』

『戦争終結!!』

西村先生がどこから現れて、その張りのある声が教室内に響いた。

「」「」「よっしやああ!!」「」「」

Fクラスの野郎共の野太い歓喜の声に包まれるDクラス、そして補習室。

「す、すいませんっ」

「いや、謝ることはない。Fクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ」

「まあそう勘違いするな。Dクラス代表」

「……どういう事だ？坂本」

幻聴を聞いたように平賀は、坂本に視線を向けた。
それに坂本はフツと笑う

「言外無用で頼むが、俺達の目標はこのDクラスなんかじゃない」

「あのAクラスだ……か？雄二」

「っ!？」

突然の声にその場にいた全員が、声の聞こえた教室中央に顔を向けた。

「……達也」

忌ま忌ましく呟く雄二に小悪魔のような笑みを達也は向ける。

してやったり

とでも今にも言いそうだ

「久しぶりの再会にそんな不快な顔すんなよな。
俺でも少し落ち込むぞ？」

「知るか。つてかお前は自分で言ってる時は落ち込む奴じゃねえだろっが」

「ハハツ、違くない」

嫌々ながら話す雄二に対して、笑う達也と呼ばれた男子生徒。周囲の連中は状況把握もままならなかった。

『いつからいたんだ！？あいつ』

『幽霊だったりして・・・』

『おいおいマジかよ・・・』

『テライケメン氏ね』

『テラ氏ね』

『リア充爆発しろ』

『リア発しろ』

Dクラスの連中はまだしも、Fクラス連中は不吉な事を考えていた。

「ま、まあ話は戻るけど、やっぱりAクラス狙いだっただ訳か」

「落ち込むなよ。Fクラスじゃ日常茶飯事だ」

「お、おう。っは！」

雄二！俺は落ち込んでなんてないんだからな！
そこところは勘違いするなよっ！」

「ああ、分かってるよ。お前はすぐに落ち込むからな」

「だから落ち込んでなんかねえよ!!」

達也は身を乗り出して雄二に反論する。

といっても雄二はどこ吹く風といった様子であるが

「えーつと雄二。この人は？どこかで見た気もするけど・・・」

「・・・気になる」

「ウチもどこかで・・・」

三者三様似たように首を捻る。

ちなみに明久は今朝見ているはずだ。

「ん？ああ、紹介がまだだったな。Aクラスの五十嵐達也だ。雄二とは幼なじみって関係だな。よろしく頼む」

「・・・え、Aクラス!?!」

自分達の作戦の危機に雄二以外のFクラス連中は驚愕の声をあげる。

何か不都合でもあったか?・・・思い当たるとしたら、狙いのAクラスに所属する生徒に狙ってるのをばれて良いの?ってどこか?

雄二の狙いがウチだったのは翔子も気づいてる訳なんだけど・・・

まあいや

「安心してくれ。俺はクラスにはらすつもりは無い・・・多分」

「凄く不安なんだけど!」

「まあいいだろ。それより君は?」

「あ、自己紹介がまだだったね。僕は吉井『バカ』だよ。つて雄二!言葉被せないでよ!」

「あー、あの吉井バカ君ね。この間の放送は驚いたよ」

「シャアアアア!雄二の馬鹿やるおおお!」

ズサツズサツと雄二の後ろの壁にカッターが二個突き刺さる。

ああ、自分の意思じゃ無かったのか。・・・つまんない」

「声に出てるからねっ!?!」

「おっと失礼。許してくれ。つい本音が出ちゃった」

「笑顔でそんな事言わないでよ!?!余計悲しんだからね!?!」

右手に雄二に向けていたカッターを初対面な奴に投げて良いものかと握りしめる明久。

僕はFFF団の連中とは、540度違うんだよ!!

とは、後の明久談。

一応、一回転して180度だという事にびっくりだ

まあ、とりあえず

「さっきから俺を奇異の目で見てるそこの君。
俺は珍獣でもなんでもないんだけど何か？」

スツと明久から視線を外し、一人だけ違う感情を剥き出しにして
いる人物に向けた。

驚愕

その言葉に彩られた顔が不屈にも達也への行動に変わった。

「……何すんだよ？」

突然、青髪の男……？は達也の腕を引いたのだ。

突然の出来事にその場にいた青髪のそいつと達也以外はついてい
ていない

「話があるんだ……大事なお話」

「……？分かった。雄二、少し皆を連れてFクラスにいてくれ。
先に帰りたいなら先に帰ってきてくれても良い」

こいつの目から推測するに……

なんて少年ジャ プの王道バトルの主人公の師匠役のような真似は

出来ないが、嘘は言っただけには見えない。

だが重要な話って何だ？

一見女にも見えるけど、男子用の制服だし

・・・まさか久保君と同じ？

ブルツ

考えたくないぞ。

初めて会ったんだぞ？

って事は一目惚れ！？

やめろっ！！何を考えているんだ！？俺！？

いつものように考える事を切り替えてだなー

「まず、単刀直入に聞きたい。君は六道輪廻を信じるかい？」へ？
思考が戻り周囲を見回すともう部屋には青髪と自分以外いなくなっ
ていた。

「六 骸さんか誰かですか？リボンの・・・」

「！知ってるって事はやっぱり君も転生者なんだね！？」

転生者？知ってるって事は？毎週日曜朝に絶賛放送中だぜ？

「転生者って？」

「えっ？違う・・・の？」

「俺は六道輪廻があつたとしても、前世の記憶があつたりはしないぜ？」

「え……？本気と書いてマジで？」

「ああ……」

『……………』

二人しかいないDクラスの教室を数秒間、悲壮感漂う沈黙が支配した。

青髪の奴の背中には冷たい汗が流れていた。

「あー、一つ聞いていいか？」
「……………うん。予想は出来てるけど……………」

「それじゃ遠慮無く。お前には前世の記憶があるんだな？」

面白いモノを見つけたように笑う俺の問いは、青髪以外の奴が聞いたとしたら俺を精神科医に連れていってやるだろう。そんな馬鹿げた質問に青髪は静かに頷いた。

「……………フフッ」

「信じられない……………よね？」

「信じるよ。けどただこんな貴重な体験をしてる奴がいるなんて笑えるぐらい俺は運が良いって思ってな」

「本当・・・？」

「嘘ついてどうすんだよ」

若干涙目で上目遣いしてくる青髪に思わず心がグラツとしちまったのはお兄さんとの秘密だ。

俺はノーマル俺はノーマル俺はノーマル俺はノーマル

「ありがとうっ！！」

ガシッ

「え・・・？」

何故に抱き着くのだろうか。いや、抱き着かない。

反語になってない

そうだ！俺はノーマルなんだ！！決してBのつくLoveじゃないんだ！！

それに俺はその・・・翔子が好きな訳だし・・・なんて言うか・・・その・・・

つまりだなっ！！

「お、俺はBLじゃないんだああああ！！」

「ふわっ！？」

ビクツとして俺を見上げる青髪。身長に差がかなりあるため必然的に上目遣いとゆ〜なんとも強力な攻撃をしかけてきた。

く 改心の一撃

達也に519のダメージ

「グツ………」

「え、えつと大丈夫？」

なぜこいつはここまで仕種や声質やら女っぽいだ！？

「葉王？ いったい残って何をしておるんじゃ……？ え？」

「あ、秀吉（優子）！？」

あれ？

二人ともお互い言った事に顔を見合わせる。

というより青髪（以下葉生）とのこの体勢を見られたのはかなりまずいんじゃないか？！

「な、ななな？！ お、お邪魔したのじゃー！！」

「は！ ま、待ってよ秀吉！ / / /」

秀吉の反応でやっと俺達の体勢に気づいた葉生は慌てて抱き着いていた手を離し廊下を走る秀吉を追ってDクラスの教室をでていった。

「さて、一人取り残された訳だが・・・どうするか」

1、帰る（そして噂が・・・）

2、追い掛ける（そのあと合流して・・・）

選択肢二つかよ!?

ま、まあまともな選択肢なだけマシか。伏字が気になるけど。

2、だな。

流石に学園に知れ渡るのは勘弁だわ。

「離すのじゃ！わしは気にしないと書いておるじゃろっ！...！」

「いや、だから気にするしないの問題じゃないんだよ！誤解なんだってば！」

「二人とも冷静になれっの！」

「なるほどのう。要は葉王の感情表現が下手だったという訳じゃな」

「ああ（うん）」

あのあと、なんとか秀吉？の説得に成功して事無しを得た。
二人とも熱くなつてたから大変すぎたよ、ホント。「それじゃ秀吉、
僕も荷物持つてくるから正門のところで待つてくれる？」

「うむ。分かったぞい」

秀吉はスッキリした表情で頷き反転して外へでていった。

しっかし青髪といい秀吉？といいなんでこんな男の娘が多いんだ？
名目上だけ男つて事もあるかもしれないけど

「えっと……ごめんね」

「何がだ？」

「その……抱き着いちゃって……」

「ああ、それが。良いよ別に。仕方なかったんだろ？」

「う、うん」

「なら謝らなくて良かったって良い。気にしてないし」

むしろ嬉し・・・ゲフンゲフン

「そっかぁ・・・」

「それじゃ、また後でな」

「うん！」

そういえば雄二達は先に帰ったのか？

そんな事を考えながらAクラスの扉を開ける

「・・・遅い」

「翔子？待っていてくれたのか？ありがとな」

「・・・違う」

『ごめんね、抱き着いちゃって』

『いや大丈夫だよ』

「・・・許さない」

「ま、待て！なんでお前が盗聴器なんてものを使えるんだ！？やめろっ！頭が！頭が割れるうううっ！！」

雄二、覚えてるよおおおおお！！！！」

犯人が雄二と断定した理由は幼なじみの勘だが、その勘は限りなく正解に近かった。

「フッ。ムツツリー二に頼んだ甲斐があったな」

異常者、転生者に会う（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

連続してみましたかどうでしたでしょうか？

感想があると泣いて喜びます。

葉王の紹介及び主人公の紹介は明日あたりに投稿します。

長文失礼しました

主人公設定

主人公設定

名前 五十嵐 達也
年齢 16歳
性別 男
身長 174cm
体重 61kg
趣味 ゲーム
特技 ゲーム（明久レベルのゲーマー）
性格 いたって普通の真面目少年（だと自分では思っている）
客観的には、傷つきやすいガラスのハートを持つアホ（バカ）（天才）

好きな物 ゲーム
思いが真っ直ぐな人
やる時はやる人

嫌いな物 人の努力や信念を笑う人間

容姿 爆発した方が良い位に顔立ちは整っていて、日本人らしい
黒髪と黒い瞳。

本編の主人公。坂本雄二及び霧島翔子の小学生の頃からの幼なじみ。翔子とほぼ同じ時期に水奈月小学校に転校してきた。当時については後々語るとして・・・

愛想が良く誰にでも笑顔を向けるが、本当に嫌いな奴にはかなり冷酷な態度をとる。

あくまでも彼の気の許せる人は坂本雄二、霧島翔子、及び西村先生であり、本心をその他の人物にぶちまける事は滅多に無い。・・・多分。

その代わり、気の許せる人物から言われた事は余程見え透いた嘘で無ければ大抵は信じるという少し抜けている部分もある。

趣味のゲームに関しては依存度がかなり高く、夜中まで起きてオンラインゲームに出没する事もしばしばあり、一学年時にはそれで遅刻することも多々(・・・)あった。

また、やるゲームの種類だがゲームならなんでも問わない。といった万能ぶり。ギャルゲーにも手を付けているという噂も・・・

両親は彼が7歳の時に事故で他界しており、現在は親戚の人物と二人暮らしだが、その人は仕事で家にいない時間が多く、事実上一人暮らしに近い状態。

兄弟もおらず、肉親は誰もいない。が、その話題について彼は触れられると機嫌が悪くなる。

まだ吹っ切れていないからか、また違う理由なのかは不明。

学力 現在、学年首席レベルだが一学年時は良くてAクラスの下位レベル。

学年首席は彼の振り分け試験時の苦渋の努力の結果。

策略 坂本雄二には及ばないものの戦略ゲームで鍛え上げた悪知恵はかなりのもの。

身体能力　身体能力はかなり高く、学校の3階から落ちても傷一つつかない。

が、物を扱うスポーツに関してはとんで才能がない。

行動力　出来る事は出来るだけやる。成功の可能性が低い場合は博打を打つてみたりと、代表の癖に行動的

召喚獣の装備は洋風の剣、洋風の鎧を身につけている。

学園長に振り分け試験の努力の結果で気に入られたため、特別な仕様として白い翼が付いている。（本人曰く、厨二臭いからこんなもんいらねえ！！）

腕輪の能力は、使用時改めて更新します。

成績　振り分け試験の結果はどれを見ても学年トップレベル。

特に暗記科目である世界史や、日本史、さらには実技教科は群を抜いている。

名前　朝倉 葉王
年齢　16歳

性別 男の娘（男）

趣味 人間観察

特技 家事全般

好きな物 自分を信じてくれる人

嫌いな物 いつも他人を見下す人

性格 基本穏やかで感情表現が苦手。

容姿 一言で言うと男の娘。青色の髪は明久より少し長めで秀吉よりは少し短い

本編の題名の転生者にあたる人物。

原作の知識（1〜3巻まで）を持っており、原作との異なる点に疑問を持っている。

その疑問が解決したどり着く先はいつも達也なため、達也が転生者では無いと信じる反面、彼が本当は転生者なのでは？と精神上的の矛盾に心が揺れている事がしばしばある。

木下姉妹とは幼なじみで、家は道路を挟んで向かい合わせ。

両親と共に住んでおり、自分が転生者であるとばれる事なく良好な関係を気づいている。

両親は航空会社に勤めており、海外旅行に行く事もしばしばある。

学力 前世の知識を合わせてAクラスレベル

策略 坂本雄二を信頼している為、頼る場合が多い

身体能力 転生の特典？なのかどうかは不明だが、本人曰く、前世の数倍の才能がある

行動力 面白そうな事には進んで参加する。

たまにそれで痛い目に・・・

Fクラスでは秀吉と同じ立場のような存在。

須川曰く「彼女の性別は『葉王』」

案外、葉王はそれについては否定はしないケースが多い。

また、優子がらみでも良く二人とも『制裁』を加えられる事も多く、苦勞が絶えないらしい。

召喚獣の装備は爆弾、それに防弾チョッキ。

この装備は彼が前世でサバイバル同好会に入っていた事からその辺がリンクしたらしい。

是非、サバイバルで爆弾なのかという疑問に答えて欲しい。

成績 言語関連の学問が得意で現代文、古典では学年トップレベル。

英語は学年一位の実力を持つ。

振り分け試験では、より原作に近いところで転生ライフを送りたい。と無記名で教師に提出した。

人には厄日という日が必ずある(前書き)

アア、ソラガアオイ。

オレノダイジナダイジナヒホウガ

シヨウコニ・・・x

タマタマコワレテシマッタヒニモ、タイヨウハサンサントオレタチ
ヲテラス。

アア、キヨウハイイテンキダ。

イガラシ タツヤ

高橋 洋子のコメント

何故でしょうか。こんな文章でも五十嵐君の霧島さんへの優しさを
感じました。

先生、五十嵐君が戻ってきません。

木下 優子

高橋 洋子のコメント

早く還ってきて欲しいものです。

人には厄日という日が必ずある

ジリリリリ!!

ゲーム機やジャプ、マガン、サンーなどとコミック等が転がった朝の一室で目覚まし時計が大音を鳴らす。

「……うーん」

達也は整ったベッドからムクリと起き上がり……

「眠い……」

アラームを止めてまた毛布に潜った。

実はこの男、昨晚、いやほぼ毎日4時までオンラインゲームをやっていたりする

それで学年首席など、是非その頭脳を分けてもらいたいものである。

「……達也起きて」

「……あと10分」

「……遅刻しちゃう」

「……うん」

そんな達也をゆさゆさと揺さぶる手があった。

皆さんご存知の通り、霧島翔子である。美人に起こして貰えるのは

実に羨ましい事だが・・・

「スー・スー・ズ・ズ・・・!?ぎゃああああ!?!」

スタンガンで起こされるのは勘弁して欲しい。

「・・・私が作りたかった」

「あー、後で少し教えるからそしたら作ってくれ・・・な?」

時間は過ぎ、五十嵐家リビングにて復活した達也がフライパン片手に卵の殻を割り、中身を落とす。

ちなみに、翔子は料理は出来ない。いや、出来るのだが、それは原作でも理解できるだろう。

「・・・分かった。初めての共同作業。・・・嬉しい」

「いや、別に共同作業は初めてじゃないから!?!」

「・・・お互い死ぬまでずっと共同作業」

「だから翔子には雄二が・・・はあ・・・」

う、嬉しいけど・・・なあ？

翔子は雄二が好きなはずなのに甘えてくるため、複雑な感情を持つ達也だった。

「・・・少し待ってて」

「？分かった」

さらに時は過ぎ、通学の用意をして二人は玄関に来ていた。といっても翔子の用意は玄関脇に置いてあるのだが・・・

「・・・(トントントン)」

「って、無言で階段上がってくなよ!？」

慌てて叫んだ達也に振り返って翔子は首を軽く横に傾けた。しかし、達也も黙ってはいられなかった。

2階にあるのは自分の部屋と、使われていない二部屋

使われていない部屋に翔子が行く理由があるはずもなく、間違いなく翔子が行くのは達也の部屋だけになる。

その自分の部屋には、イロイロと他人に見られたく無いものがあるわけで……

「早く学校に行こう？な？」

「……駄目。ゴミ出ししないと」

ああ、ゴミ出しか。

翔子は家庭的だよな。

確かたいしたゴミは出した覚えも無いし多分大丈夫……

「大丈夫じゃねえ！？」

「……こういうのは見ちゃ駄目。見るなら私だけを見て欲しい／＼」

「いや待て！その本の理由は分かる気もするけど、それと俺の神ゲ―達がそこにいるのは関係ないからな！？」

ビシッと翔子が左手で持つ真つ二つに割れたディスクが入った燃えないゴミの袋を指差す。

そんな達也に翔子はそのディスクに視線を移した。

「……達也が遅刻したのはこれが理由。夫に遅刻させないのが妻

の役目」

「いや、夫婦じゃないから・・・ってそれは!？」

全く持ってその通りなので、本論については突っ込めない達也は袋の中に入ったあるものに気づくのだった。

「えっと・・・達也君凄く悲しそうな顔してるけど何かあったの？」

「翔子、何か知ってる？」

「・・・いや、知らない」

ゲームディスクと一緒に心まで折られたかのようにシステムディスクにうづくまる達也。彼の中では
エロ本くゲーム
という方程式でも成り立っているのだろうか？

指摘すべきはそこじゃない

「そ、そうなんだ・・・」

一緒に登校してきたところから推測するに、翔子が関係しているの

だと理解して達也に哀れみの笑いを送る我等がAクラスの常識人？
愛子とだった。

「一応、秀吉から（無理矢理）聞いた事も言わなきゃなんだけど・
」

「・・・？秀吉？」

「うん。私の弟なんだけど・・・」

とりあえず達也についてはスルーを決め込んだ三人は自分の身内等
の話を花開かせるのだった。

『五十嵐君、何かあったのかな？』

『これは声をかけるチャンスよ！』

『悲しむ五十嵐君に優しく声をかける私・・・その後・・・キヤッ
／／／』

駄目だこの女子連中。

速く何とかしないと・・・

「吉井君、君は僕を（ry」

失礼。クラス規模だったよ。頭がヤヴァイのは・・・

オレノゲーム・・・ゲーム・・・ゲーム・・・ゲーム・・・ゲーム・・・
ゲーム・・・ゲーム・・・ゲーム。マダ、コウリヤクシテナカ
ツタノニ・・・

こいつも何とかしないとまずいかも知れない。

葉生Side

場所は代わってFクラス

ガタガタガタガタ

「
」

ガタガタガタガタ

「吉井君、どうしたのですか？何かあったのでしたら私が教えてあげますよ？・・・二人で」

「な、なななんでもありません!!」

「そうですか。残念です」明久、ご愁傷様・・・WWW

僕たちFクラスは昨日の試召戦争の補給テストを受けている。

1時間目は数学

このテストの担当の先生がああ船越先生だったんだよ。

原作でも知ってたけど、明久不憫過ぎるでしょ・・・WWW

はあ・・・クラス皆が笑いを堪えてる状態だし、数学は捨てた方がいいかな？WWW

雄二なんか笑いを堪えて目から涙流してるし・・・

それより、姫路さんの弁当を食べない方法を考えないと・・・

葉生は笑いをかみつぶしながら、思考を切り替えて物思いにふけていった

時は進んで昼休み。

雄二は姫路が弁当を作ってくれたおかげで浮いた食費で全員分の飲み物を買っていた。

もちろん、後で請求する・・・明久には。

「コンニチハ、ユウジ」

ガタンガタンと自動販売機からジュースが落ちるのを確認し、ふと雄二は達也の方に振り返った。

「おう。悪いが今から作戦会議だから後にしてくれ？って、どうしたんだ、達也!？」

別に雄二でなくてもすぐに分かる達也の雰囲気の異常さ。

視点は定まっておらず、足元もふらついている。

昨日久しぶりに会った幼なじみの異常に流石の雄二もかなりの動揺を見せた。

「ドウシタモコウシタモナイ。ジツワオレガクリアシテナイゲームガ・・・(ry)」

雄二が達也の異常の原因について聞くと雄二にとって実にどうでもいい理由をカタコトで長々と話し出す達也。

「ダカラ、ソノゲームノカントクニアヤマラナイトイケナイダロ？」

「は？何言っただ、お前。別にゲームの監督なんかに謝りにいかなくて・・・も・・・」

達也は5分くらい話しつつづけた後、ようやく雄二に話す機会を回してきた。

半分くらい、そのゲームの長所を語られた訳だが。待てよ？確かそんな話をどこかで・・・

遙か昔。坂本雄二がまだ若かったころ「まだ16歳だコラ！」ろ。

夕方の馴染みの深いあの公園に二人の少年の影があった。

もう一人の幼なじみの少女、霧島翔子の姿は無い

彼女の家はかなりのお金持ちで、それなりの教養を、という執事あつてのお願いで、なんでも彼女はピアノのレッスンに通っているらしい。

らしい、というのは11歳の時の達也はまだ二人に関わったばかりで、二人については言伝に聞いた程度だった。

「雄二は最近ずっとそれやってるよね？やってて飽きないの？」

「まあな。お前は好きじゃないのか？」

「うん。俺はやってみるは良いんだけど、続かなくて・・・」

「そうなのか・・・そう言えばこんな話を聞いた事があるぜ」

雄二の問いに答えてポリポリと苦笑いする達也。

「ゲームをクリアしないで捨てちまうと、なんでもそのゲームを作った会社に頭を下げに行かなきゃいけないんだ」

「え！？ホント！？」

「ああ。だから皆飽きたとか言ってる奴は裏でこつこつやってるんだぜ」

「そ、そうだったんだ。えっと僕がクリアしてないゲームは・・・子供らしい細く小さい華奢な指を親指から順に折って数を数えていく。」

「うっ。9個もあるよ・・・」

「そうになると9個の会社に謝りに行かなきゃ行けないな！」

「そんな・・・まだ捨ててないから間に合うよね！？」

「もちろんだ。頑張れよ」

「うん！ー！」

ああ・・・そんな事もあったなあ。

はっきり言うと、雄二にとってどうでもいいような事だった。・・・
のだが、達也にとって今現在も重要な事らしい。

こいつもどこか抜けてたんだっただよな・・・

待てよ？って事は、こいつがゲーマーに走ったのは俺のせいって事
か！？

こちらを訝しげに見ている達也を置いておき、窓からスツと空をつ
ち眺めてみる

確か翔子が達也がゲームばかりで自分を構ってくれないとか言っ
たよっうな・・・

ブルツ

なんか翔子に謝らなきゃいけない理由が出来た気がする。

「なあ、達也」

「ナンダ？」

「実は別にゲームをクリアしなくても、捨てて良いんだぞ？」

「へ・・・？」

「だから、ゲーム会社に行かなくても良いんだ」

「・・・」

「・・・・・・・・」

長い沈黙の後、達也の眼にだんだんと意識の色が見えてきた。

「なんだあゝ。そうだったのか。つまりは雄二は俺に嘘をついた訳だな？」

「あ、ああ。まさか本気で信じてるとは思ってたああああ！？」

ゴキッ

達也の攻撃

雄二の頭にアイアンクロー

雄二は力尽きた

「いつもなら思いつ切り目潰しもするんだけどー」

「もう十分被害を受けたんだが」

ニコッ

ビクッ！？

「どうした？」

「ナンデモアリマセン」

「それなら良い。続けるぞ？」

出来ればそのゲームを雄二が貸してくれると嬉しいんだよな」

「……名前は？」

「黒騎士物語」

「……」

「……どうした？まさか……」

じとつとした黒眼で雄二に視線をむける。

「……必ず貸そう」

何か決心したように雄二が頷いた。

「へえ〜。雄二はPS3は持ってなかったはずなんだけど？」

実は達也は雄二の苦心した顔を楽しみながら眺めていたりする。

『貴様、謀ったな！？』

『のせられたのが悪いんだろう？』

視線だけで会話する二人

「貸してくれなかったらどうしようかな？」

「……そうだ！翔子に教えてあげよう 坂本君の密かなる想いを」

「なっ！？」

「フフツ まあ、俺は他にも雄二の弱みを握ってる訳だし、どうせだしついでに腐ったアメリカザリガニでも雄二の家に送ってみようかな？」

「わ、分かった！分かったからやめてくれ！」

明らかに動揺を見せる雄二に、達也は満足げに口元を綻ばせる。

『残念だったね。昨日翔子にあんなものを渡した罰さ。精々期待しているよ』

『達也、貴様それも覚えて・・・チツ、月の無い夜道は気をつけるんだな』

「フフツ それじゃあ頼んだよ。坂本君」

満足そうに鼻歌を歌いながら達也は元来た道を帰っていった。

「坂本？遅いから皆食べちゃってるわよ？急がなきゃ」

「・・・おう。今行く」

違う自動販売機で同じく飲み物を買っていた島田と合流し、雄二は明久達の待つ屋上に向かうのだった。

「雄二、島田さんも遅かったね」

「坂本が遅かったのよ」

何してたのかしらね、とからかうような眼で島田が見てくる。

「そうだ明久」

「何？僕は女の子のメアドなんて知らないよ？」

「お前に聞く事じゃないだろうが・・・」

「あ、そうだね！って凄くとばされた気がする！ぼくだってねえ！」

「あー、分かった分かった。それで明久。黒騎士物語ってゲーム持ってるか？」

「持ってるけど・・・どうしたの？」

「頼む明久！一生の頼みだ！！そのゲームを貸してくれ！」

「へ！？良いけど・・・」

珍しく自分に頭を下げる雄二を見て明久不思議そうに首を傾けながらそう言つと、雄二は胸をホツと撫で下ろした。

『その代わりこれ食べてくれる？』

『?まあ、そのぐらいなら・・・』

「姫路弁当いただくぞ?」

「あ、はい。お口に合うかわかりませんが・・・」

突然の視線での明久の言葉に疑問を感じながらも雄二は重箱に詰まった姫路の料理、そのうちの卵焼きを口にほうり込む。

「ああ。うん・・・味は普通グパツ!？」

バタン

ガシャガシャン

ガタガタガタ

苗字がサから始まる人

四十四位 全体運が最悪

特に名前がユから始まる人は外出は避けるようにしましょう

人には厄日という日が必ずある（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

なんだか達也の壊れ具合がひど過ぎた気もしますが、今回の件で少しはゲームへの依存度は減ると思います。・・・多分

壊れた場合を書くときにカタカナで片仮名で書くことしか思い浮かばず、こうなってしまうました。

壊れ具合を何か良い方法で書く方法があれば教えていただけると嬉しいです。

長文ありがとうございました！！

策謀！対Fクラス？（前書き）

えっとあらかじめ書いてたのを修正していくだけでかなり時間がかかる（泣）

出来るだけ早く投稿できるように頑張ります・・・

それではござ（＾O＾）ノ

策謀！対Fクラス？

翌日・・・

「早く行くぞ？翔子」

「・・・うん」

普段通り、といった様子で一人で達也の家を出る。

「行ってきます」

「・・・行ってらっしゃい」

「・・・なんでだよ？」

「・・・夫婦みたい」

「いやだからなんでよ・・・」

出発早々、翔子の夫婦漫才のネタ振りに頭を悩ませる達也だった。

「……………」

「……………」

が、二人の会話はあれつきりで通学路の半分が過ぎるまで二人には会話といった会話は無かった。そんなこと知らないとはかりに、上空は雲一つ無い青空がひろがっていた。

「……達也」

「ん、なんだ？」

「……昨日はごめんなさい」

やっと見つけた会話のきっかけに、話題の切り出しを考えていた達也も、突然の謝罪に眼を白黒させる。

「へ？昨日……？」

「……うん。私のせいで達也が悲しんだ」

「あ、あれか」

実は……」

達也は雄二が数年前に言った事を遠回しに、出来るだけ雄二が関係ないように笑い話のように翔子に話す

それを聞いた翔子の反応は

「・・・そう」

ある方角を見据え冷徹にそう言い放った。

この時、あるFクラスの代表がベッドから冷や汗をかきながら飛び起きたらしい

「おめでとございます雄二に・・・（死亡）フラグが建ちました！！」

なんだ？この電波は！？

とうとう俺の脳もおかしくなって来たかな？

・・・まあ、雄二に翔子のフラグが建ったとか今更過ぎる気がするし。いつかあ

「そういえば翔子」

「・・・なに？」

「昨日言いそびれたんだけど・・・なんで朝からお前がいたんだ？鍵はかけたはずなんだが？」

「合鍵なら持ってる」

作った覚えなんざ一切無いのは俺が記憶喪失って事なのか！？

「・・・なんでさっ！？それに理由になってねえ！？」

澄み渡る文月の青い空に少年の叫びが響くのだった

「おはよう、翔子ちゃんに達也君」

「おはよう、翔子に達也」

「・・・おはよう」

「おはよう、二人とも」

教室に入ると愛子と優子が挨拶してくれた。
いま、思ったんだけどAクラスで親しい女の子は皆、子って名前
なんだよな

俺には名前が 子さんとの友好度を高める何かがあるのか？

やめよう。俺にそんな特殊能力的な類のモノは無い。

「今日は普通だね」

「昨日がおかしかっただけよ」

「ハハハ、あれはまあ・・・イロイロあつたんだよ」

「ふうん。まあ詳しい事は聞かないわ」

「ボク的には聞いてみたい話だけどね」

そう言ってくれる二人に、心の中だけでも感謝しておこうと思う。

自分で作った弁当と教材の入ったバックを個別に用意されたシステムデスクに置く。

「そついえば優子。前に言っておいた話だけど・・・」

「ええ。ちゃんと聞いて（拷問して）きたわ」

「・・・いま変な言葉が聞こえたのはボクだけなのかな？」

「いや、俺も聞こえた気がする」

「・・・（コクン）」

ああ、優子の弟よ。

一昨日聞き分けが良かったのはいつも優子から教育（という名の拷問）を受けているからなのかい？

・・・ご愁傷様とだけ言っておく

ハハハ、弟さんも大変だね

妙な伏字に苦笑いを浮かべながら、三人は弟の秀吉に合掌した。

「どうしたの？三人揃って手なんか合わせて・・・」

「・・・なんでもない」

「ああ、気にするな」

「気にしない方がいいよ」

「?????」

「僕も呼び出していつたいなんなんだい？五十嵐君」

「ああ。それじゃあみんなFクラスがDクラスに試召戦争で勝ったのは知っているよな？」

久保も含めた五人でクラスの談話するように用意されたスペースでそれぞれが好みの飲み物を飲んでいた。切り出したそんな俺の質問に翔子以外は、なぜそんな話をするのか分からないといった表情をしてから頷いた

「えっと、達也君はFクラスが気になるの？」

「気になる・・・まあ言いようによってはそうなるか。
先に言っておく。」

Fクラスは間違いなく俺達Aクラスに試召戦争を仕掛けてくる」

「「「っ!?!」「」」

ここまで言った直後、一瞬にして一昨日Fクラスの面子の前で言った言葉を思い出した。

『安心しろ。俺はクラスのやつらに教えるつもりは無い』

・・・あれ?どうしよう。ま、まあ多分って付けた気もするし、いつかあ。

・・・つてのはまずいから後で雄二あたりに謝っとこ。

「もちろん、これは仮定なんかじゃない。確定した未来だ。別に未来が見えるとか厨二くさい事は言う気は一切無いが、これは間違いなく真実だ」

言葉を続ける俺に、翔子以外はポカンと口を開けている。

タバスコ突っ込んでみたいかも・・・

いけないいけない。

王水（姫路の弁当）ぶち込むよりマシだが流石に笑い事じゃ済ま・・・
・済むかもな。

あれ、おかしいな？

なんで姫路さんの弁当って伏字で入るんだ？

まあいいけど……

「って事は私に秀吉からFクラスの戦力を聞けって言ったのは……」

「ああ。あらかじめ聞いておいた方が作戦が立てやすいだろ？」

済ました顔でそうは言ってみるもの……

どうしよう!？

完全に対Fクラスを考える感じになってるぞ!？

まあ、元々その気だった訳だが、Fクラスとの約束が……

……雄二の嫌がらせは覚悟しておくべきか？

内側はかなり複雑な感情がうごめいていた。

「それならボク達だけじゃなくてクラスの皆の前で言った方が良くんじゃないのかな？」

「そうね。確かにFクラスを卑下している所はあるけど、達也がそこまで言つたら皆、油断なんかしないはずよ？」

愛子が提案した案に三人は頷く。

その後から優子が代表して理由も付け加えた。

「確かに優子の言う通りがもしれない。だが、恐らくFクラスはクラス単位では攻めて来ない」

「「「??.?」」」

「それはどういう事だい？確かに戦力差は大きいけど・・・」

「代表対決って事？」

「当たり前だ。」

だが、あくまでもそれはAクラスへの最初の提案だろう。
もしAの代表が俺だと分かればあいつらの提案は変わる」

ちよつと格好付けて指パッチンを試してみる。

「「「・・・」」」

え？指パッチンした俺がバカだったから誰か何か言ってくれえええ
！（泣）

「・・・達也。それはしなくてよかった」

「う、うん。ごめん」

ありがとうございます、翔子様！！
気まず過ぎて死ぬところだったよ！！

・・・話は戻り

「流石に吉井君も君が代表だという事に気づいているんじゃないか

い？」

数秒間考えるそぶりを見せていた久保がそんなことを尋ねてきた。

・・・吉井限定なのか？

そんな疑問も浮かんだが、スルーを決め込むことにする。

「それは無い。一年の間の俺と翔子の点差はわかってるだろう？」

「確かに・・・」

「それもそうね・・・」

「え？達也君って前から学年首席じゃなかったの？」

思い出したように頷く久保と優子。

反対に一年の終わりに転校してきた愛子は二人の納得する姿に首を傾げた。

「ああ。実は俺の元の成績じゃあAクラスに入る事すら厳しかったかもしれない」

なんで久保君と優子が元の俺の成績を知ってるのかは分からないが、総合成績はこの振り分け試験でいたい3000点位は上がったと思う。

ゲームが三ヶ月禁止された事が代償だったんだから、当然といえば当然だな。

・・・ああ、あの三ヶ月は死ぬかと思っただぞ。

「アハハ・・・ゲームしないだけでそんなに上がるなんて・・・」
一年間禁止したらどれくらい上がるのかな？

愛子はそんな疑問を持つが、言わない事にした。
言ってしまったら最後。

幼なじみの少女が本当に実行する様な気がしたからだ。
あの様子じゃあ、一年間ゲームをやらなかつたら死んでしまう勢い
だった。

「とりあえず話は戻すぞ。確かなんでこの五人を集めたか？だった
よな。」

それは「――」

「「それは・・・？」」「」

翔子以外の三人が揃って俺の言葉を重複する。

「・・・何となくだな」

ドタドタドタッ

アハハ、ちょっとした趣返しだバカヤロー

しかし、見事なこけっぴり役者びっくりな演技だね。ウンウン

「ア、アンタね」

最初に復活した優子が、憎たらしいような目で見てくる。

「まあ良く考える。第一Fクラスの戦力も分からないのに俺達の戦力を限定出来る訳が無いだろ？」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

優子の後から復活した二人も含めて三人で顔を見合わせる。

このゲーム・・・俺の勝ちだ！！

「・・・達也はもうFクラスに誰がいるか知ってるはず」

「・・・」

あれ？翔子さん？

何故にそれを言うんでしょうか！？

言うんだったら俺が勝利を確信する前に言えよ！！

「・・・それは理不尽」

うっ・・・何も言えない

ガシッ

翔子の全く持つてその通りの言葉に意気消沈する達也。

その達也の肩を何者か（ってか優子）が掴む。

「少しお話ししましょうか」

「ちょうどボクもお話したかったんだ」

「僕もそれに便乗させてもらおう」

「えっ？あれ？優子以外キャラが変わってるううあああ！！」

一言言おうか。

皆、良い笑顔だった 一言じゃない

「もう・・・達也のせいで何度も本題から外れてるのよ？」

「なっ！？さっきのは間違いなくお前達のせ・・・」「ギロツ」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
いごめんなさい」

優子はともかく愛子はノリで怒ってるふりをしてるだけだろ、絶対
！？

久保君は・・・まあ良いんじゃないかな？

考える事を放棄した。

「それで？なんで知ってるかは後で聞いてあげるから、なんで私達五人だけ集めたのか教えてくれるかしら？」

「は、はい！分かりましたであります！！」

えっとまずは姫路瑞希。皆知つての通り、久保君クラスの学力ちからを持っています。なので久保君に相手をお願いしたい。」

「分かった。任せよう」

「二人目はえつと・・・土屋、土屋ムツツリーニ。確かこんな名前だった気がします。ムツツリーニは保険体育じゃあ学年トップレベルの実力を持つてるので、確か保険体育が得意の愛子さんに相手を任せたいです。」

「OK！ムツツリーニ君か。面白そうだな」

注）決して名前ではありません

「三人目は優子さんの弟の木下秀吉。

学力はそんなではないけどメンバー的に言えば妥当に彼が来るはずです。

もちろん彼は、彼の事を知っている優子さんをお願いします」

「秀吉ね。分かったわ」

「四人目は坂本雄二。多分あいつの事だから何かしてくるだろうから」

「・・・うん。私が殺る」

視線を優子から翔子に向けた瞬間、翔子は自分から立候補した。

字が不穏当だったのは何かの間違いだろう。・・・多分

「五人目は、苗字は分からないけど名前は葉王。「朝倉よ」

？ああ、朝倉葉王。学力は未知数だから俺がやる。って言うおつと思っただけど優子さんが何か知ってるみたいだな」

「知ってるもなにも私と秀吉は葉王の幼なじみなんだから。

それに、なんで葉王の事知らないで他の人の事は分かるのよ」

優子は呆れたような目を達也に向け、一つため息をついた。

・・・そこまで有名なのかよ、名前すら聞いた事無かったぞ？まあ、苗字なら朝倉なんて・・・たくさん・・・

あゝ、妙にいらついできた。忘れよう。

「・・・達也？」

「ん？なんでもないよ」表情に出ていたのか翔子がこちらを心配そうに眺めていた。

すぐに考えは振り払ったのに気づくとは幼なじみの勘ってやつか？

「？まあ葉王の学力についてだけど、あの子は全教科Aクラス上位レベル。Fクラスに今いる理由は全教科のテストを無記名での提出」

「全教科？それはいくらなんでも無いんじゃないのかい？」

俺の感じた疑問を久保君が聞いてくれた。翔子と愛子も同じ疑問に思っていたようだし、ありがたい。

「ええ。あの子は元からFクラス連中（明久や雄二）と親しかったからほぼ間違いなく自分から行ったのよ。」

・・・Aクラスの設備を捨ててまで行きたいクラスか。

ふと、一昨日会ったFクラスのメンバーを思い出してみる。

確かにそれぐらいの価値はあるかもしれないな・・・

「話は戻すけどあの子の文系教科はトップレベル。」

最近は成績を見せて貰った事は無いけど、多分落ちてはいないはずよ」

「・・・なるほど。それじゃあ俺達は高得点を取れる奴が文系科目で真つ向勝負するか、わざと他の教科で相対して俺か翔子、久保の三人のうちの誰かが得点で差をつけるか、の二択になる訳だな」

いつの間にか敬語を取り外した達也は、自分達の葉王に対する戦術を述べた。

勝つだけなら間違いなく後者を取る。

だが、Aクラスとしてのプライドを少なからず持っている俺達にとつて相手の弱点をつく。といった事は出来るだけ避けたいのだ。だから前者を取らない。といった確率は0ではない。それに、相手に教科の選択権があった場合は必然的に前者でしか勝てなくなる。

となるとあいつの相手は俺って事になるか・・・

「あいつの相手は最初と変わらず俺。それで良いか？」

四人の思考でもそれが1番勝つ可能性が高いと終着したらしく全員が首を縦にふってくれた。

そこでちょうど予鈴がなり、高橋女史が教室に入ってきた。

「優子の話は後でまた」

「分かったわ。一応言っておくこともあるしね」

言っておくこと？

俺の話と弟の話で違った点でもあったのか？

達也は優子の発言に疑問を持ちながらも、自らの席（優子の隣）に戻っていった。

策謀！対Fクラス？（後書き）

長文お読みいただきありがとうございました！

なんだか試召戦争終了までかなり話数が多くなりそうです・・・m

（ m

Aクラスなんですけどね

それではまた（＾O＾）ノ

人間には家でしか見せない一面もある・・・多分(前書き)

どうも、たぬくです(^o^)

今回は達也の同居人が登場します。

まあ、もうすでに出てるんですけどね。ネタバレネタバレ

それではぶっぞ(^o^) /

人間には家でしか見せない一面もある・・・多分

『FクラスがBクラスに攻め込んだ』

その噂は瞬く間にAクラスである俺の耳に届いた。

・・・と言ってもBクラスは目の前だし、防音設備も調ってるAクラスでも生徒の声なんか微妙に聞こえるんだよな。

「んで優子。戦力の確認のために弟から聞いた話をお願いできるか？」

「ええ、まずー」

5時間目、高橋女史の授業だったが、試召戦争で借り出されたこともあり、Aクラスは自習になっていた。

5分休みは短すぎて、昼休みは愛子が部活動の集会有り、五人が全員が集まらなかったため、関係の無い生徒と席を入れ替えてもらい優子がこの自習の時間に話してくれる。という事になったのだ。

やはり優子があげたFクラスの戦力は

総合成績が学年トップレベルの力を持つ姫路瑞希

総合成績はAクラスで、文系教科に関しては学年トップレベルの朝倉葉王

勉強に関してはイマイチだが、計略に関しては神童を思わせる『元神童』坂本雄二

総合成績ではFクラスレベルだが、保険体育に関しては学年トップレベルの土屋康太。通称『ムッツリーニ』

成績に関してはどれもFクラスだが、演技に関しては文句の付け所が無い？演劇部ホープ『魔女（笑）の弟』（ボキッ）
アアアアアア！？

木下・・・秀吉

そして六人目

文月学園史上初の称号を与えられたバカ『観察処分者』吉井明久

観察処分者の肩書きの分、召喚獣を呼び出す回数も多いし、確かに魔女のお・・・木下弟よりは一騎打ちだったら戦力は上かもしれない。

「って優子！なんで関節技をかけたんだよ！？」

「不穏な気配がしたからよ」

「クッ・・・理不尽だ」

「それでもない。とだけは言っておこう。」

「ま、まあ優子のおかげでだいたいの戦力の見当もついただろ」

「そういえば木下弟はなんで大事な情報を敵である優子に言ったんだ

る・・・う？

ふとそんな事を考えた時、優子の顔が視界に入った。

・・・ああ。無理矢理だったんだっけ。

なんか木下弟には悪い事をしたよ。うん
後で何か奢ってあげよう

「まあ、こんな訳だけど質問あったりするか？」

「はいはい。いま、FクラスはBクラスと試召戦争してるけどFクラスが負けちゃったらどうするの？」

「確かに、それで土気の上がったBクラスが攻めて来たらどうするんだい？」

初めに愛子、次いで久保君が付け足す感じで質問を重ねる。

「あー、まずは愛子の質問に答えるぞ。その場合になってもFクラスの代表の事だ。敗戦クラスがまた試召戦争を挑める三ヶ月後に何度でも仕掛けて来るだろう。その時の予習になったと思えばいい。久保君の質問だが、Bクラス代表の根本は俺に頭が上^{ケス}がらない。そんな代表の事だ、仕掛けてくる勇氣も無いだろ」

「あ、そ、そうなんだ。分かったよ・・・」

後半忌まじましいように顔を歪ませる達也に少し戸惑いながらも愛子と久保は了解の意で頷いた。

「他に質問はあるか？無いなら各自自習に戻ってくれ」

翔子と優子も特に気になる点は無く、誰の手も上がらずに解散となった。

ちなみに席順は

優子 達也

愛子 モブA

翔子 モブB

久保
である。

モブC

「翔子ちゃん、達也君とBクラスの代表って前に何かあったの？」

愛子は前の二人が自分の課題に取り組みはじめたのを確認してから振り返り、翔子に小声で気になった事を聞いてみた。

「……うん。詳しくは聞いてないけど、達也が本気で怒ったみたい」

本気で怒った。そんなことプライドのいざこざもある高校生なのだから多々ある事は承知済みだ。

少しの喧嘩程度ならあそこまでBクラスの代表を嫌うまで行くとは思えない。

何かあったに違いない。ボクこと、工藤愛子は確信した。この時から探偵工藤愛子の推理が始ま「らないからな」
！！

「達也君っ!?!」

「シッ。自習中だぞ」

達也は自分の口に人差し指を当てて周囲を見回すように目でサインした。

辺りを見回すと、不思議そうにクラスメイト達がこちらを見ていた。一部からは妬みの視線もある。

「アハハ、何でもないから邪魔しちゃってごめんね」

「まったく、何が探偵工藤愛子の推理が始まる。だよ。キャラが全然違うだろうが」

「おかしいな。心の中で言ったつもりだったんだけど……。達也君って心理学者?」

「・・・声に出た」

「アハハ・・・は、恥ずかし」

「全く愛子は・・・裏でこそそやってても達也なんだから気づかれるに決まってるでしょ？」

「なんだよそれ・・・俺はなんでも出来るわけじゃねえぜ？俺は男を愛する趣味はねえし（ピクツ）行き過ぎた暴力をすることも出来ねえ！！弟を拷問することもできなあああ！！？」

「はいはい、国民的アニメの名ゼリフを変な染色しないでね」

ちなみにワンースの十巻の最後の辺のルイの言葉が元だ。

はつきり言って面影すら見えないのだが・・・

なんで優子は気づいたんだよ！？

「葉王の影響で王道マンガはほとんど読んだの。嘗めないで欲しいわね」

それよりAクラスの奴らは愛子が少し大きい声を出したら振り向く癖になんで俺が悲鳴あげても誰も見もしないんだ？

日常茶飯事だからです

また電波だよ・・・本気で憑かれてんじゃねえか心配になってきたよ・・・

「まあとにかく、あの根本クソに関しては友人が乏されたからムカつい

て殴っただけだ。それ以下でもそれ以上でもないからな。あまり詮索はしないでくれ」

嘘は言っていない。紛れもない事実だ。

友人と幼なじみのちよっとした違いはあるけどな。

とりあえずは納得してくれたみたいで、言い出しっぺの愛子と疑問に思っていた他の二人も頷いてくれた。

達也家にて・・・

その後、これといって取り上げることも無く、その日は終わった。

ああそうそう、FクラスとBクラスの試召戦争は協定により休戦になったらしい。どうせだし忌ま忌ましいBクラスに攻め込んでやるうかともおもったが・・・やめた。

俺個人の意思だけでクラスを動かすのはどうかと思うしな。

なによりBクラスに勝つてもうちにはメリツトが無い。あつたとしたらそれこそ先程言った個人的な満足だけだ。

そんな事を考えながらも、フライパンを片手に料理を続ける。

ガチャ

「帰ったぞ」

そんな俺の元に玄関を開けて入ってきた同居人が現れた。

「今日は早かったんだな。料理一人分しか作ってないぞ？」

「ああ。自分でやるから良い」

暑苦しいような声でそれだけ言って同居人は襖を開けて自分の部屋に入ってしまった。

同居人の部屋が下の階で俺の部屋が二階。

二階にある他の部屋は将来設計が早いことに子供の部屋にするつもりだそう。まったく、三十代後半になって相手もいないってのになんで……

まあ将来設計が早かったおかげで俺が自分の部屋で生活出来るんだけどな。

え？いい加減同居人の名前ぐらい言えって？
まずはヒントからだな。

1、皆も知ってるあの人

2、まんま黒いゴリラ

なんでだろう。これだけで悩む必要もなく人物を特定出来る気がするぞ？

とりあえずあの後作った野菜炒めの二人前と作っていた一人前の豚カツ定食、そしてバナナ一本を食卓に置く。

「一応鉄人の料理も作っておいたぞ？」

「おう。すまん。だがいい加減俺を鉄人扱いするのはやめろ」

これで本当に全員分かっただろう。

俺の同居人、それは文月学園の生活指導担当、西村教諭である！！

なにその設定！？

って思った人。

これは設定ではなく紛れも無い俺の親戚なんだorz

「いや、この呼び名の方が慣れてるし、それに週に五回仕事終わったらスポーツジムに泳ぎにいってるんだからこのあだ名に納得の一言だろ」

「ああ、学校では公私を分けるならまあいい。それよりだ。何故俺の主食が毎回バナナなんだ！？」

「いや、なんかノリでな」

ニシシと笑う俺に「なんのノリだ！？」と鉄人は頭を抱えた。

「まあそれは冗談だって、本当はホラ！」

あらかじめ隣に椅子に載せておいたフルーツバスケットを鉄人の前に置いてやる

「……もう何も言わないぞ」

「それで？FクラスとBクラスの戦争はどっちが有利なんだ？」

文句を言いながらも果物を食べる鉄人にそんな事を聞いてみる。

鉄人は生活指導と並びに補習担当である。

『鬼の補習』だとか生徒の中でも噂になっており、なるべくお世話になりたくない。

そんな補習担当だから分かる試召戦争の戦況。

戦争で戦死した生徒は補習室送りになるため、補習室に送り込まれた生徒がどちらが多いかでいたい（・・・）の戦況は分かるのだ。

「珍しいな。お前から話題を出すとは・・・」

「まあね。俺も今回の試召戦争には興味があるんだよ」

普段は俺が鉄人の例え話に付き合う事が多いためか、鉄人は値踏みするように俺の方を見た。

「まあいいだろう。興味がある理由は聞かんが変な気は起こすなよ。今のところだが俺のところに来たのはどちらも似たような数だな。あの馬鹿共はBの教室まで到達したようだしもしかするともしかするかもな。」

そう言うと面白そうにニカツと白い歯を見せる。

あれ？ゴリラって歯は白かったっけ？

まあ、鉄人としてもFクラス（馬鹿ども）の下剋上は見えて楽しいんだろう。
それにこの人は、若干・・・本当に若干だがFクラスに肩入れしているからな

「だが、あの根本クスの事だ。何か仕掛けてるに違いない」

「教師の前で生徒をクス呼ばわりするな、馬鹿もんが。・・・まあ俺としてもBクラスの代表は気に入らんからな。今回は許してやる」

良いのか、それで。仮にも教師だろうが・・・

「ごちそうさまでした。・・・そんじゃ俺は簡単にシャワー浴びるから・・・」

「ああ。遅くまでゲームして遅刻したら今度こそ容赦しないからな」

「今までで容赦された覚えがないんだが・・・」

一言愚痴を言っつてリビングを出る。

それと鉄人は学校では頭が堅いが、家ではよほど変な事で無ければだいたい許容してくれる。

教師は甘やかしたいが心を鬼にして・・・といった話を聞くが鉄人はその典型的な例だと思う。

さ、とつととシャワー浴びてモン　ンフロ　ティアでもやるか。

人間には家でしか見せない一面もある・・・多分（後書き）

お読みいただきありがとうございます>（――）<

同居人が鉄人という異様な設定なのですが、気に入ってくれると嬉しいです。

長文失礼しました

VS、Cクラス!! (前書き)

どうも、たぬくです。

今回はやっと試召戦争です

なんか長かったような短かったような・・・

では、じじぞ (^ O ^) /

V S、Cクラス！！

いつもとなんら変わりの無い朝・・・

ガラッ

「私はCクラス代表小山友香！我々CクラスはAクラスに試召戦争を申し込めます！！」

そんな朝はすぐに過ぎ去ってしまうものである。

ドタバタと足音が近づいてきたと思えば、強引に開けられた扉から入ってくる少女。本を読んでいる俺があえて言わせて貰えば興味が無いんだが。の一言だ。

にしても小山ってあの小山か？確か根本クズと付き合ってる・・・

「Aクラス代表はどこ！？それと木下優子も出てきなさい！」

Cクラス代表の小山のヒステリックな叫びがAクラスに響く。

「〴〵指名だぞ、優子」

「達也もでしょう」

「え、めんどくさそう」

半ば優子に急かされる形で俺は読んでいた本を自分のシステムデスクに置き、席をたった。

その本の表紙にかけてあったカバーが置かれた際にピラツととれてしまった。

その本の名前は……

『バカとテスラー』……やめようこれ以上先は見ちゃいけない気がする。てゆうーか世界観的に駄目だ。

「さっきの音量で聞こえてたんだから前出てこなくっても良かったんじゃないのか。」

「え、い、五十嵐君！？Bクラスにもいなかったからもしかしたら、とは思ってたけど本当にAクラスだったのね！」

クラスの誰も何も喋らないせいか、俺の咳きはCクラス代表に聞こえていたようだ。

しかも、何か親しげである。いや、俺はあいつの事よく知らな……あっ！？

「もしかしてヒステリック小山か!？」

随分と斬新な名前だったから思い出した。

ヒステリック小山もとい、小山友香、さらに根本恭二は一年時の達也のクラスメイトであったりする。

そもそも何故気づかなかったかは達也の中で彼女はヒステリック小山、という名前の人物だからなのだろう。

「知り合いなの？」

隣を歩いていた優子が不思議そうに尋ねてくる。

「ん？ああ。元クラスメイトだ」

ふうーん。と適当な相槌を打つ優子。

興味ないなら聞くなよ・・・

「あなたは木下優子！？

あなたよくも私たちを豚呼ばわりなんかしてくれたわね!？」

「えっ？何の事かしら？」

優子に気づいた直後に喰ってかかる小山。

そんな小山に優子はなんの事か分からない、とばかりに首を捻った。

「優子、そんな事言ったのか？」

「いや、そんな事言った覚えは無い・・・わね」

「だとよ。それが俺達（Aクラス）に試召戦争を申し込む理由なんだったら、今すぐ撤回しと・・・け？」

優子の様子からするに、本当に本人にもそんな覚えは無いらしい。その事を伝えたかったのだが、伝えたかった人物は何故か拳を震わせていた。

「・・・ないのに」

「え・・・？」

「私なんて名前さえも覚えてもらって無いのにつ！
もう豚呼ばわりされたなんてどうでも良いわ！
開戦は午後1時！首を洗って待つてなさい！！」

バタンツと来た時より乱雑に扉が閉められ、教室内は静まり返った。

「どうしたんだ？あいつ・・・」

「「「「「・・・」」」」」

なんだろ？クラス全員からの視線が痛い。

俺が何かやったのか？

いや、やったとしたら小山を本名で呼んだだけなんだが・・・

「達也、今度くらい名前で呼んであげたら？今の聞いたら翔子だつて許すはずよ」

冷たい視線のまま優子がそう言って翔子に視線を向ける。すると、翔子も直ぐに頷いた。

「いやでも・・・ヒステリックって呼ぶのは可哀相だろ？」

なんだろう、冷たい視線が増えた気がする。
ついでに背中にあたる殺気も増えた。

「敵ながらあの子、よく一年間堪えてた、って褒めてあげたいわ」

「堪えてた、って何を？俺はあいつに嫌がらせした覚えは無いぞ」
ため息をつかれた。

なんだよ、この理不尽は？なんか一方的に俺が悪いみたいじゃないか！

落ち込んで良いんだよな、これ！

「ここまで鈍感だとは思って無かったわ。翔子の事にも気づいて無いみたいだし」

「っ (。Q。)！？しょ、翔子はか、勘違いしてるだけなんだよ！」

またため息をつかれた。

「もう良いわ。みんな、午後1時からの試召戦争に備えるように！無いとは思っけど、点数が減っているなんて事があつたら回復テストを受けること。以上よ」

優子はクラスのみんなの方に振り返り、代表らしい激を飛ばす。

あれ？このクラスの代表って・・・俺じゃね？

「まったく達也君はもう少し女心つてものを分かった方が良いんじゃないカナ？」

「いやだから、俺が何をしたんだよ」

今はSHR後の休み時間。大抵の人は読書なんかをしている。席に座って目を閉じてる者もいる。多分彼等は午後から始まる試召戦争のイメージトレーニングでもしているのだろうか？
案外、みんなそこまで油断はしていないようだ。

そんな中、俺はいつものメンバーに囲まれていた。

「よく考えてみなさい。私の名前は？」

「は？木下優子だろ」

「ボクの名前は？」

「工藤愛子だろうが」

優子が突然名前を聞き出したかと思えば、愛子も何か気づいたらしく、また自分の名前を聞く。

「……それじゃあ小山さんの名前は？」

「ヒステリック小山」

またまたため息をつかれた。

「ホントに可哀相に思えてきたよ」

「なんで本名が芸名みたいなのよ・・・」

「・・・小山さんはハーフでもクォーターでもない日本人」

いや、それは俺も不思議に思ってたんだよな。
でも、ホラ変わった人っているだろ？

「意識的にそういう名前にしたんじゃない・・・？」

「「「「「はあ・・・」」」」」

ため息で八毛られた。
なんか悔しい

「で？優子、作戦がなんか考えてるのか？」

この話題じゃ俺が取り付くしまがない気がするのととりあえず話題
を変えることにする。

「特には考えてないわ。戦力差は明白だし、油断しなければ大丈夫
でしょう」

・・・案外すんなり話題を変えさせてくれたな。
なんか怪しい気もしないでもないけど。

「悪いんだけどクラスとの試召戦争でやることの提案が一つある。」

「

「・・・何？」

「ああ。まずは――」

「来たぞ！Aクラスだ！！」

午後1時開戦の時刻に、Cクラス前の廊下でそんな声が上がった。

「来たみたいね」

まさかあつちから仕掛けてくるなんて予想外。

普通なら戦力の大きいクラスは守りに徹した方が有利なのだけど・

Aクラスの代表、五十嵐君は何を考えてるのかしら？

「小山さん！廊下の人員を増やして！」

「もう突破されるの？もう少し頑張りなさいよ！」

ただでさえあの（・・・）本隊への人員も残さなくちゃいけないのに、

先鋒隊だけで配置しておいた人員がやられるなんて・・・

「いいからお願い！Aクラスの代表が出てきてるの！」

「え・・・？」

「『『『『『試^{サモン}獣召喚』！！』』』』』」

『くそっ！援軍はまだか！？このままじゃ押し切られる！？』

Cクラスの男子生徒の一人がそんな呟きを漏らした。

これは本隊が出てくるのは間違いないな。

戦争開始直後、補習室送りにした生徒は油断していた6人。そして残りの廊下にいる戦力は5人。点数が減っているのは戦力外にみなせば3人。予想通りの戦力の配置だ。

俺達の戦力は俺、翔子、久保君、優子、愛子。それにAクラス中間レベルの生徒7人を合わせた12人

廊下の戦力がこれなら本隊はざっと20人くらいだろう。残る10

人は・・・つと

「愛子と優子と久保君、渡辺君と根岸さん、それに佐藤さんは背後からの奇襲にも注意して！！」

大方戦力が減ってきたところを急襲する為にFクラスと交戦中のBクラスやらに紛れてるんだろ。

「あちらの本隊の到着みたいね」

四人に指示を飛ばした後、横にいる優子がそう呟いた

背後から視線を戻して前に向き直る。すると、Cクラス代表小山を含めた13人がいた。

思っていたより奇襲部隊に戦力を傾けていたみたいだ

「随分と嘗めた真似をするのね」

小山の冷たいような声が廊下に響く。

「残念。俺達はCクラスを嘗めたつもりなんて一切ない」

ピリツとした緊張感の中、俺は思った答えをそのまま言った。嘘は言っていない。

だから、親の仇を見るような目で見られるのは勘弁してもらいたい。

「よくもこの状況でそんな事が言えるわね」

実際、小山の言う通りこのままなら戦況は芳しくない。

「『『試獸召喚』！』』」

背後から後ろを任せた六人の声も聞こえてきた。

大方、伏せておいた兵をまわしてきたんだろ。

俺の隣で待機している翔子以外のクラスメイトも度々視線を背後に移している。

「なあ、小山。面白い話をしよう。

ある国の軍は戦火に見まわれ軍の強化、兵の増員に困っていたとする。

そんな時、軍の鍛練度の高い国が一時逗留させてくれるなら軍の強化を手伝おう、と使者を派遣してきた。その場合、軍の強化や兵の増員に困っていた国はどうすると思う？」

そう言い区切るとほぼ同時にAクラスの前と後ろの両方の扉が開き、Aクラスの生徒がなだれ込んで来た。

「っ！？井岡君、撤退するわよ！！」

「まあ待てよ。策がこれだけだったらさっきの話は全部無駄だろうが。翔子」

「・・・うん。みんな、お願い」

翔子は小さく頷いて首元に付けた盗聴機（気にしたら負け）にそつと呟いた。

瞬間、Dクラスの前の扉が開いた。

「そんなっ!?!」

「小山。さっきの言葉を返そう。本当に言めてたのは……お前達Cクラスだ」

Dクラスから現れるAクラスのクラスメイト達。

交渉の為、Dクラスに勉強を教えるのに反対した人もいたが、他人に教える事で余計理解度が高まる事を（優子が）指摘すると、渋々だが賛成してくれた。

もう一回言いたいんだが、Aクラスの代表って俺だよな？

とりあえず

「どうする？この状況じゃ、代表としては早めに負けを認めるべきだと思うけど？」

あくまでも、代表としては……だ。本音としては俺の召喚獣の経験値を稼ぎたいん訳で戦いたいわけだが。あ、バトルマニアでは無いぞ？

「私だつてクラスの代表として豚呼ばわりされた皆の無念を晴らさなきゃいけないの」

チラッ

「な、何よ!?!私は何もしてないわよ!」

とりあえず背後にいた優子に視線を向けると、優子も話が気になっ

ていたのか、こちらに振り返っていたので見事に視線があった。

「はぁ……。まあ、やるしかないわな。

高橋先生、Aクラス代表五十嵐達也、総合科目でCクラス代表に勝負を仕掛けます!!」

「っ！Cクラス井岡が受けます!!」

Cクラス

井岡 誠二

総合科目 1692点

VS

Aクラス

五十嵐 達也

総合科目 5121点

「なんだあいつの召喚獣!?見たことないタイプだ」

『白い翼……。だと?厨二要素満載じゃねえか!天使様気取りですかあ?』

やめろ!俺をそんな目で見ないでくれ!!

「なっ!五十嵐、お前いつの間にそんな点数を!？」

そ、そういえば思い出した。一年の時、井岡君は俺の前の席だった

わ。

べ、別にショック過ぎて井岡君のことをさっきまで忘れてたとか、
そういう訳じゃないからな！

「悪いけど君の事は知らないんだわ」

相反する達也の思考と言動だったが、白い翼をはためかせ一瞬にし
て井岡君の召喚獣を切り裂き、消滅させた。

「三倍の点数だなんて・・・」

「通常のさんば」・・・Aクラス、霧島翔子、Cクラス代表に数学
勝負を申し込む」・・・グスン」

わたくしが悪かったです、すいませんでしたあ。

「Cクラス、吉田が受けます！！」

Cクラス

吉田 杏奈

数学 145点

V S

Aクラス

霧島 翔子

数学 409点

一瞬にして一突きにされ、消滅していく吉田さんの召喚獣。

クラス規模でも点数が上のAクラスにCクラスは多勢に無勢。もはや風前の灯になっていた。

「Aクラス五十嵐達也。再度Cクラスの代表に総合科目で勝負を申し込みます」

「っ！試獣^{サモン}召喚！」

「承認しました」

元々広がっていた総合科目のフィールドにゆっくりと舞い降りて小山に視線を向ける召喚獣。

結果は言うまでもなく、試召戦争はAクラスの勝利で終結した。

「それじゃあ戦後対談でもするとしますか」

補習室に連行されていたCクラスの生徒達も戻ってきた。

俺達（Aクラス）が言うのはなんだが落胆の色が顔に出ている。

「・・・・・・・・」

小山は俯いたまま教卓用に用意された椅子に座っている。

「まず、最初に言っておきたいんだが、お前達を豚呼ばわりなんて木下はしてない。本人も本当に記憶に無いようだし、恐らくはFクラスの木下弟が成り済ましでもしていたんだろう」

『じゃあ俺達がAクラスに挑んだのはお門違いだった訳か？』

「まあ、そういう事になるな・・・」

「????」

どうして、と言いたそうに顔を上げて目を白黒させる小山。
私の私情が最終的な原因なのよ?ってところか?

そんな彼女にとりあえず待て、と手で合図をした。

「普通だったら設備を落とされるのがルールなんだが、そんな事をしてはつきり言っただけ俺達にメリットがある訳でも無いし、お前達Cクラスに怨みをかうのもはつきり言っただけだ」

「『!!!!?』」

ザワザワとCクラスの生徒が動揺の声をあげる。

さらには教室の端に立っている優子の顔が俺に呆れの視線を送っていた。

ちくしょう……ちゃんとフォローしてやったのに。

「まあ条件もある訳だけどな」

「……言いなさい」

条件という言葉に一気に静まり返るCクラス。
負けたのに責任を負わないとでも思ってたのかよ。

一応、『戦争』だぞ、コレ

「まず一つ目。半年の間、俺達Aクラスに攻め込まない事。

二つ目。さっき話した木下の件だが必ず信じる事。最後は敗北していない事を良いことに戦争の引き金になったFクラスに試召戦争を挑まない事。この三つだ。これを守るなら和平交渉にて終結して事にしても良い。破格の条件だと思うがどうだ？」

『もちろん受けよう。良いよな代表！』

『これで設備が守れるなら万々歳よ！』

一つ目の条件は普通だとして、残りの二つは明らかに私情がはさんであるから、少しAクラスの皆に後ろめたい気もするが、まあ大丈夫だろ。……多分。

クラス全員が了承の声をあげる中、小山は椅子に座ったまま無言でこちらを見ていた。

……あれ？怒らせたか？

小山は数秒経ってからスツと目を閉じて嬉しそうに微笑んだ。

「全然変わってないのね。良いわ。いや、その条件でお願いするわ」

「そうか。それじゃあそういう事にしておくから」

優子に視線を送り、Cクラスから出ようと扉に手をかける。

「五十嵐君」

「ん？」

「ありがとう」

・・・な、なんか感謝されるって背中がむず痒いんだな。
今、それを実感したよ。

「どういたしまして、友香」

「!?!」

『なんですか、このラブシーン!?!』

『う、うるさいっ!』

そんな声が今、出てきたCクラスから聞こえてきて思わず顔を羞恥で真っ赤にする達也。

優子に冷やかしの目で見られながらもAクラスの教室に入っていく

の
だ
っ
た。

V S、Cクラス！！（後書き）

お読みいただきありがとうございます（^人^）

次回はやっとFクラス戦に入ると思います。・・・多分

それでは、また（^O^）ノシ

転生者葉王？（前書き）

どうも、たぬくです（＾Ｏ＾）

誠にすみません。前回後書きで書いたFクラス戦まで行きませんでした。

これからはもっと慎重に発言しますm（――）m

では、どじぬ（＾Ｏ＾）ノ

転生者葉王？

「あゝ、失敗した。勝手に名前なんて呼ぶんじゃないかった」

Cクラス戦後、黒髪の少年、達也は自分のシステムデスクに突っ伏していた。

思い返してみると、彼の言った言動は、彼氏（根本）のいる彼女（友香）にとって、変な誤解を生んでしまう産物でしかないのだ。

いくら俺があいつ（根本）を嫌っててもやっちゃいけない事もある。それが素で起きてしまったモノでもあるため、余計罪悪感も大きい。

「安心しなさい、間違っても小山さんが嫌がる事は無いから」

「そうかあ？・・・それなら良いんだけど」

そんな達也を見兼ねた隣の席の優子が励ましてみるも、達也の不安げな様子は変わらない

この時間Aクラスは試召戦争後の回復試験を控え、一部（達也）を除く生徒全員が自分のリクライニングシートに座り、自主学習に励んでいた。

そのため、達也の声は教室に響き近くの生徒達の集中力を少し乱していたのだ。

その意図を汲み取ったのか達也は一息ついた後、自分の鞆からノートを取り出し先日に行われた授業の復習を黙々とやり始めたのだった。

時は過ぎ、

ようやく、今日中に行われたテストをやり終えた達也と翔子。

たいして点数が減っていないが念のため、というやつだ。

今更ながらなんで総合教科を選んだんだよ、3時間前の俺……。

教室には総合科目を使用した数名の生徒。

それとDクラスに教えていて何かしらの成長を自覚し、同じく全てのテストを受ける生徒もいた。

ちなみに優子や愛子、久保君などのほとんどの生徒は、1、2教科の回復試験を受けた後、部活に行くか、帰宅していった。

「ふう……」

3時間ぶつ通しで強張った体を伸ばした後、筆記用具を鞆にしまう。

帰ったらとりあえず雄二から借りた黒騎士物語をやって、その後……

今までゲームに熱中し続けた理由が雄二の嘘だったと分かってても達也はゲームを熱心にやり続けている。

曰く、はまっちまっただから仕方ないだろう？

そんな訳で今日もまた帰宅後にするゲームの予定をたてているのだ
った。

『こ、この服、ヤケにスカートが短いぞ！』

そろそろ帰宅しようか。と鞆を持ち上げた時、達也にとって実に不
愉快な声が廊下から教室に聞こえてきた。

Aクラスの生徒達も鞆に入れようとしていた荷物を片手に不思議そ
うに廊下の方を向いていた。

『スカート』という単語の入った防音の教室にまで聞こえる男子の
大声だ。不思議、いや嫌な気分にしかならないのだろう。

『いいからキリキリ歩け』

『さ、坂本め！よくも俺にこんなことをー』

『無駄口を叩くな！これから撮影会もあるから時間がないんだぞ！』

『き、聞いてないぞ！』

と、先程の男の声と違う男の声の言い争いに達也はピクピクと頬を
歪ませ不機嫌なオーラを放ちながら持ち上げた鞆をまたシステムデ
スクに下ろし、スタスタと扉の前に歩いていく。

そんな不機嫌オーラ全開のの達也の姿に残っているほとんどの生徒が苦笑いをしていた。

ガラツ……ガラツ（扉がゆっくりと開けられる音）

「ようこそいらっしやいましたクソ野郎」

「ヒ、ヒッ!? お、お前は五十嵐!？」

扉が開かれた時には既に扉の前にいた達也は、予想の範疇を越えた根本の服装に目を白黒させた後、無意識の内にまるで下賤なものを見るような目で根本を見下していた。

いや、これは予想以上にグロいぞマジで……

「それで何の用だ? 用がないなら帰ってくれないか。気持ち悪い」

「クツ。お、俺はBクラス代表根本恭二だ!」

「知ってるよ、んな事。それだけなら早く帰ってくれ。気持ち悪い」

そう言っただ達也は扉を根本ごと（……）閉めようと扉に手をかけた。

ちなみにAクラスの面々は達也の豹変ぶりに思わず絶句しながらその光景を見ていたりする。

「ま、待ってくれ! 俺達BクラスはAクラスに宣戦布告するつもりなんだ!」

「へえ。そう雄二に伝えてこいとも言われたのか？不様だなあ。去年罵倒していたやつにパシられてんじゃねえか。言っただろ？お前じゃ雄二の足元にも及ばねえんだよ。気持ち悪い」

もう最早、気持ち悪いを根本の代名詞として使いはじめた達也。流石にやりすぎという感もするが、予想の斜め上に行く女装で現れた根本に日頃から聞く根本の悪評で溜まっていたストレス（根本へのいらつきパラメータ）が限界に達したらしい。

「それで？用はそれだけか？ならとつと帰れ。気持ち悪い」

「わ、分かった！すぐに帰る！」

今にも扉を根本ごと閉めそうな達也に根本は苦虫をかみつぶしたような顔をして自分のクラスに帰っていった。

「……はあ」

「……お疲れ様。演じるのは大変」

席につき、身をリクライニングシートの背もたれに委ねて、今まで入っていた力を抜く。そうして一息ついていると、いつの間にか隣には帰宅する準備を終えた翔子が立っていた。

「別に演じてるつもりはねえよ」

「……演じてる」

「別に」・・・演じてる」あゝ、俺の負けです。もうなんで分かるんだよ翔子は・・・。やっぱり幼なじみとしての勘ってやつなのか？」

「・・・違う。妻としての勘」

「もう何も言うまい」

「・・・ならこの婚姻届に実印を押す」

「いやなんで婚姻届が靴から出てくるとか、俺の部屋に保管しておいた朱肉と実印があるのか、とかなんでさっきまでの脈絡で、なら婚姻届に・・・になるのか、とか突っ込みどころがありすぎる・・・」

そんな事を言いながらもきちんと突っ込んでいるのだから流石だ。

明日、いや明後日か・・・

明後日にやっと誤解が解けるんだ。

「・・・？どうかした？悲しそうな顔をしてる」

・・・悲しい、んだろうか。一年の時から計画していたのに、なんで直前になってびびってるんだろ。

「いや、なんでもない。少し考え事をしてただけだから」

「・・・分かった。それなら良い」

数人が教室からでていったのを見てから、確認の為に時計を見た。

午後5時29分

あ、俺の誕生日だ。

・・・変な事を考えた俺が憎い。

でもなんかの数字で自分の誕生日が一致するとテンション上がらないか？

上がらない？

・・・すみません、調子乗りました。

「そろそろ帰るか。今日は買い物があるから途中までで良いか？なんなら送ってくけど・・・」

「・・・ついていく。もう家には連絡した」

翔子はスツとさつきまでメールを打っていたのか携帯を鞆にしまった。

・・・いくらなんでも行動が早過ぎないか？

機械が苦手な筈の翔子が、あれほどの速さでメールを打てるなんて・・・絶対におかしい

「・・・酷い。ちゃんと打てた」

怒りました、とばかりに先程鞆にしまった携帯を出して自慢げに送信トレイの1番上のメールを見せる翔子。

心の中の声に何故翔子が気づいたか、とかはスルー。なんか今更す

ぎる。

宛先 新井 里美（翔子専属のメイド）

題名 帰らない

本文

「えっ！？帰らないって、家出みたいじゃねえか！」

「・・・大丈夫。新井さんは私が帰らない時は達也の家って分かってるから」

「いや、全然大丈夫じゃないから！帰らない時はなんで俺の家なんだ！？その点詳しく！」

「・・・それは恥ずかしくて言えない／＼／」

は、恥ずかしくて言えな・・・／＼！？何されるんだよ！？俺は！な、なんだ！？この胸の高ぶりは？

い、いや駄目だから！

絶対に駄目だから！！

絶対に絶対に駄目なんだから！！

結局、

達也の必死の説得で翔子は買い物の後、自分の家に帰る事になった。

回復試験、及び自習だった一日を挟んだ二日後。

「だりい・・・」

達也は自らの体調の不良具合に苦しんでいた。

「大丈夫？昨日までピンピンしてたわよね。まさか徹夜でもしたの？」

ギクッ

優子の言に体を震わせ、

「い、いや・・・昨日は夜中に起きてしまっ・・・」

「図星みたいね・・・」

言を構える達也だったが言葉を震わせている時点で効果は一切無かった。

まったく何をやってるんだか・・・と呆れの視線を送ってくる優子。実の事を言つとFクラスと戦争を行うのは恐らく明日だから、体調を崩さないように。

と俺が檄を飛ばしたのがちょうど昨日だったのだ。

「・・・返す言葉もございません」

「そんな遅くまで何をしてたのよ・・・」

「禁則事項です」

達也はどこかの未来少女の言葉を使った！
周りからの視線が冷たくなった！

「じよ、「冗談だつて！ゲーム」「ゲームなんて言ったら殴るわ」・・・
は、はははゲームなんて夜遅くにやってた訳ないじゃないか」

「・・・達也、これは何？」

今まで聞くだけだった翔子が鞆からゴソゴソと一枚のディスクを取り出した。

そのディスクには堂々と黒騎士物語、と赤い文字でかかれていた。

「う・・・しまった。寝ぼけてたから隠すのを忘れて・・・」

ゲームを翔子に捨てられて以来、部屋の翔子の手の届かないところに隠しながらもこそこそと続けている達也。

「ふーん。寝ぼけるまでやってたって事で良いのよね？」

「くっ……つい口が滑って……って待て優子！それは殴りじゃなくて関節技ああああ！？」

ボキッ

儂くも達也の間接は一本、また一本と外されていくのだった。

「おはよう、皆。って達也君どうしたの！？」

「か、間接が……」

「間接？って事は優子がやったんだね？なんだ、びっくりしちゃったなあ」

なぜか優子にやられた、と分かるとホッと安心する優子。

なんで安心したんだ、今！？絶対におかしい！俺は死にかけなんだぞ！？なあ！

「おはよう、優子」

「・・・おはよう」

「おはよう、優子に翔子ちゃん。」

床で俯せで倒れている俺を無視して、のどかに挨拶を交わす三人。なんだろう。俺が背景みたいに扱われている気がする。あれか？俺っではないのか？ねえ。・・・グスッ

「そういえば優子。達也君はなんで倒れているのかな？」

「ああそのこと？。このバカは自分で言ったくせに徹夜でゲームして体調崩してるみたいだね。ちよっとお仕置きしただけよ」

それを聞いた愛子は楽しげに「やあ、と笑みを浮かべる。

「ふーん。災難だったね、達也君。お詫びとは何だけど僕のスカートの中でも覗いてみる？」

「っ！！？」

バツと床に俯せていた頭をあげる。

ガシッ

「エッ！？」

「・・・浮気は許さない」

「頭があああああ!？」

が、男として見たかったものは見えず、翔子のアイアンクローによって意識を落とした。

「達也、具合悪いんなら保健室に行ってきたら？薬飲むだけでも結構違うわよ。」

「今は体調より俺の頭蓋骨と全身の間接が心配です」

「アハハツ、確かに頭蓋骨と間接は保健室じゃ治せないよね」

「もういい。少し保健室行ってくる。Fクラスの奴らがきたら上手く対応してきてくれ」

三人が頷くのを確認してから、節々が痛む体を引きずりながら保健室へ向かうのだった。

一方、Fクラスでは・・・

「まずは皆に例を言いたい。周りの連中には不可能だと言われているにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったの事だ。感謝している」

壇上で雄二が実にらしくない様子でFクラスの皆に礼を言っていた。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」
普段そんなことを言わない雄二のらしくない、本当にらしくない（大事なので二回言った）言葉にFクラスの生徒達も胸が一杯になっているだろう。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突き付けてやるんだ！」

『おおーっ！』

『そうだーっ！』

『顔だけじゃ・・・ゲフンゲフン勉強だけじゃねえんだーっ！』

最後の一人はどこかの誰かに怨みがあるらしい。

クラスの皆が団結して声をあげる様に、葉王は一人目を輝かせてそれを眺めていた。

前はこんなクラスじゃ無かった。

もちろん、前というのは葉王の転生前でのクラスのこと。

こんなバカが一杯いる騒がしいクラスでも無かったし、男女の間に大きな壁があった。友達はみんな「あんな奴らうるさいだけよ」とか言って、コミュニケーションを取ろうともしなかった。

僕もそれに賛同していたし、その通りだと公言したこともあった。だけど、たまに協力してやったらどうなんだろう？なんて思った事もある。

主に文化祭や体育祭の時だ。もちろん、協力しようとして頑張ってくれてる人もいたし、いつもから分け隔てなく話してくれてる人もいる。だけど結局クラスは纏まらないし、男女の仲の溝は深まるばかりだった。

そんな時、よく通っていた書店で、この世界に来るきっかけ。『バカとテストと召喚獣』の本を初めて手にとった。

友達も側にいたから少し目を通したただけだったけど、本の中に書かれた世界に僕……私は惹かれた

そんなこんなで気づいたら売っていた3巻までを買っていて、ほとんどアニメとかマンガの世界にのめり込んでいったんだけど……まあ、それは置いておいて……

その二次元の空想でしかなかった憧れの場所に、いま、僕はこうしている。それがたまらなく嬉しくなって、僕は皆とは違う思いで胸が一杯になっていた。

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちでは日本史でフィールドを限定するつもりだ」

「霧島さんが日本史で苦手なんて聞いた覚えはないんだけど、どうして日本史を？」

理由は分かっているけど流石に空気になってる気もするので口を挟む。

「ん？葉王か。ボウツとしているようだったが、話は聞いてたのか？アハハ、藪蛇だったみたいだ。話を聞いていないと見ていたのか？雄二は目を細めていた。」

「まあね。それでなんで日本史を？」

「まあ待て。まずは条件だ。その条件は小学生程度のテスト。方式は100点満点の上限あり。召喚獣勝負ではなく、純粋な点数勝負とする」

「試召戦争は、テストの点数がだいたいの勝敗を決定する。だから、テストの点数を使った勝負なら、採用される。」

「でも同点だったら延長戦だよ？そうだったら問題のレベルも上げられるだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？幾らなんでも運にそこまで頼り切った方法を作戦と言うものか」

「ならその方法が作戦だと思える理由を勿体振ってないで言いなよ」

「葉王の言う通りだな。それはある問題が出れば、アイツは確実に間違えるとしてっているからだ」

学年首席の確実に間違える小学生レベルの問題。

それを聞いて、全員が何の問題かを期待を高ぶらせて口を閉じる。

「その問題は――」

転生者葉王？（後書き）

お読みいただきありがとうございます（＾Ｏ＾）／

では、また次回で！

前例の無い宣戦布告(前書き)

すいません、テスト勉強で投稿遅れましたm()m

今回はバカテスっばいナニカってのが正しいかも。

それではどうぞ(^o^)/

前例の無い宣戦布告

翔子Side

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

雄二は達也の言った通り、Aクラス代表に一騎打ちを申し込んできた。

対して交渉の席に座るのは優子。私が行こうかとも思ったけど、喋るのがスローペースの私よりは優子の方が良い。そう思ったから優子にお願いした。

雄二の他にはクリーム色の髪の毛のバカっぽい男の子と、姫路さん。それと優子にそっくりの・・・多分、優子の弟さん。でも男の子には全然見えない。他には目立つ青色の髪の毛の男の子。カメラを隠し持っている静かそうな男の子。

カメラは持ってきちゃ駄目なのに 盗聴器とスタンガン持ってきてた人

「うーん、何が狙いな？」

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

確かにそうじゃなきゃ宣戦布告はしないと思うけど優子はそれを聞きたい訳じゃないはず。

「・・・ふーん。まあ良いんじゃないかな。『達也が』負けるとは思えないし」

「「「???」」」

凄く嬉しそうにFクラスがしている勘違いを否定する台詞を場に居るFクラス全員に聞こえるようにわざと大きく発言する優子。

優子は多分すつごいSなんだと思う。驚愕して呆ける雄二達を凄く楽しそうに見てるのも証拠の一つ。

「ま、待て！Aクラス代表はそこにいる霧島じゃないのか!？」

こちらに指を指してくる雄二。幼なじみの私にでも社会マナーは守って欲しい。それに幼なじみなんだから、名前で良いのに。

「あら違つわよ。翔子は学年次席なんだから。ね？」

優子は絶対に楽しんでる。

そんな事を考えながらも、とりあえず優子のふりに頷いて返す。

驚きの事実には驚愕するFクラス的面々。

「言ったじゃないか、雄二!!前に立ってたのは五十嵐君だったって!」

「うるせえ！回想部分のせいで書かれもしなかったくせに威張るな、バカ!!だいたい明久の言うことは信じ難いんだよ!」

「バカつて言わないでよ！それより雄二だってそんな馬鹿みたいな事（メタ発言）を言ってるじゃないか！」

二人して罵声をかけあう。あの子は雄二と仲が良いみたい。だって達也と雄二はいつもあだから。喧嘩するほど仲が良いって言葉もあるから絶対そう。

「ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

雄二が腕を組み、顎に手を当てながら聞く。だけどクリーム色の髪の子と言い争ったのを目の前に見た私達としては、違和感以外の何物でもない。

「別に試召戦争の方法はもう決まったんだし、そんなことを話さなくても良いと思うけどな？」

「・・・聞き方を変えよう。なんでCクラスとの試召戦争をAクラスの勝利で終わらせなかったんだ」

達也が言っていた通り、雄二は試召戦争の方法の変更を狙ってるのかな？

でも優子は簡単に譲る気はないみたい。

「・・・まあそれくらいは良いかな。それは代表の独断だよ。何か考えがあるみたいだったけど教えてはくれなかったよ」

教えてはくれなかった。

それは嘘じゃない。

だけど、私達、少なくとも優子は達也の意図に気づいてるはず。

そこで雄二は初めて顔に難色を示した。

雄二のあの顔は本当に久しぶり。幼なじみの私から見ても凄くレア度が高い。達也に見せたら嬉しそうに笑うと思う。
だから・・・

翔子は自分のシステムデスクに置かれた鞆からあまり使っていない携帯を取り出し、カメラモードを起動した。

パシヤッ

「っ！っおっ！？」

「・・・惜しい。雄二、もう一回同じ顔をして？」

「あいつに送られると分かかって撮られてやるような馬鹿じゃねえ」

「・・・残念」

達也が喜ぶのに・・・

ガラガラッ

私が携帯を下げて雄二が安堵のため息をついた時、教室の扉が開いた。

「ん？雄二達来てたのか」

「ほう・・・分かっていたくせによく言うじゃねえか」

そこには保健室で薬を買ってきたであろう達也がいた。

Side out

「優子、交渉役は俺が変わろう」

「分かってるよ。大変だったんだから後で何か奢ってね」

「・・・あ、ああ。食券で良いだろ？」

「うん」

俺と入れ違いで交渉の席を立ち、嬉しそうに翔子の方に優子は歩いていく。

・・・猫かぶりもここまで来ると見上げたものだと思う

「それで？ 試召戦争の方法は決まったのか？」

「知らない思考を振り払い、未だに怨念がましい目で見てくる雄二にそう問い掛ける。」

「この様子だと代表が翔子じゃない事に気づいたばかりってところか。」

「まだだ。だがとりあえずは代表同士の一騎打ちを基盤に置いて話し合ってた」

「へえ。それじゃあお前はその代表同士の一騎打ちではなく、それを派生したやり方で試召戦争がしたい・・・と。そういう事か」

「ああ。誰かさんのせいで当初計画していた作戦は水の泡になっちゃまったからな」

ニヤリと口元をあげ、ほぼ包み隠す事なく嫌み、兼挑発を達也にぶつける雄二。

対して、まるでゲームをしている子供のように凜々とした笑顔で雄二を見据える達也。

互いの事を理解しているからこそ、歯に衣着せぬ構えで二人は相対する。

「それは事前に調査をしていなかったお前達が原因だと思うが？」

「わざわざめぼしい生徒や先生全員に口止めまでしていた奴が良くそんな事を言えるな」

「チエツ。バレてたか・・・一応、人伝いにしておいたんだが・・・ああ勘か。

見事にはめられたみたいだな」

そうは言うが達也の顔は後悔した様子には見えないし、相迎えの席に座る雄二の表情は一向に好ましくならない。

その他の生徒はそんな二人の会話による表情の変化を食い入るように見ていた。

「さつき木下にも聞いたんだが、Cクラス戦をAクラスの勝利で終わらせなかったんだ？風の便りでは圧倒的差だったと聞いたが？」

「フフツ。雄二の考えている通り、教室の変更を行わなかった事で恩義を感じてるDクラス、それにあの根本^{クラス}率いるBクラスへの牽制の為。

まあ、個人的な感情が理由つてのもあるけどな」

「当初はDクラスだけへの牽制だったんだが、一石二鳥になって良かったよ」とさらに付け足す。

やはり・・・と思案顔の雄二の隣で吉井が不安そうに雄二を見つめていた。

他のFクラスの生徒も不安げな顔は隠せない。

「だがDクラスがCクラスへ宣戦布告した場合どうする？Bクラスと戦う羽目になるが・・・？」

「まあ確かにあの根本^{クラス}のいるクラスとは生理的にやりたくない気もしないでもないが・・・」

「別にやっても良い。と、そういう事か？」

雄二は片足をもう一方の足にのせて挑発的にそう言った。

「まあな。確かにクラスの過半数が拒否をしなければ俺は別にBクラスと殺り合っても良いと思ってる。

Bクラスが攻めてきたなら、その時はその時でクラスの殺る気は高まるだろうからな」

特に根本^{クラス}がAクラスに女装して来た時に居た奴は特にそうだろう。

やるか分からない場合なら避けたいが、やるのが決定しているんだつたら早く関わる事をやめたいだろうし、本気で殺ってくれるだろ。

「・・・・・・・・」

「雄二、もう圧力を種に交渉するのは諦めるんだな。はつきり言うてお前に俺達Aクラスを脅せる手札は無いはずだ。」

もちろん、あちらにはあの寡黙なる性識者^{ムツリーニ}がいるんだ。個人的な（女子絡みの）手札ならいくらでもあるだろう。

だけどAクラス全体を動かすのは難しい。多分、優子や翔子はその程度びくともしない。・・・多分

「腹を割って話せ。そうすれば考えてやらなくもない」

「・・・・・・・・」

手を頭に当てて思案する雄二。それを達也は面白そうに見ていた。

達也としては答えは決まっているのだ。

それながらも思案する雄二に、今までにやり込まれていただけに鬱憤を晴らすにも良い気分転換なのだ。

両者が沈黙したまま身動き一つしない時間が数秒続く。そんな中、最初に動いたのは――

明久だった。

「雄二、君の犠牲は無駄にしないっ!!」

「ま、待て明久!なんでカッターなんかを俺に向けてるんだ!？」

「そつだぞ、吉井。カッターだと腹を切り裂く。だろつが！腹を割るには2メートルを時速100キロ突っ込ませないとつ！」

「反論する点はそこじゃねえだろつが！俺はお前が分からないつ」

「思つてみればそつだね。それじゃあ鉄人を呼んでくるよ！」

「待て明久！お前は盛大に勘違いをしているつ！」

注）一部生徒の共通概念

鉄人・・・人の皮を被つたナニカ

「離してよ雄二！君のその思いは無駄にしないからつ！！！」

まだまだ続きそつなので閑話休題・・・

「それで話を戻しても良いか？達也」

「おう。良いぞ〜」

どうにか場が治まつたところで雄二が額に筋をたてながらも、話を切り出した。

「えつと・・・確か雄二が腹を割つて話すんだよね」

「お前は本来の目的を忘れて悪ノリしてたのか明久……」

それもそのはず、達也と明久の雄二への仕返しは日頃の鬱憤を晴らすようにエスカレートしていったのだから（一応どれもまだ未遂）

「それで雄二。お前が考えている条件を教えてください。さっき言った通り、それがそのまま通る可能性もある」

「ああ、お言葉に甘えて言わせて貰おう。対戦方法は6対6。タッグ戦を含めた三点先取の五戦。対戦教科は全て俺達Fクラスが決めさせて貰いたい」

「6対6のタッグ戦有り……か」

タッグ戦。

確かに試召戦争の回数分、コンビネーションの点を取ればタッグ戦はFクラスが有利だな。うん、盲点だった。

「分かった。その対戦方法は受け入れよう。だが、対戦教科をそちらだけが決めるのは賛同しかねるぞ。

せめて2つが俺達。三つがお前達が決める。それがこちらとしても限界だ」

「……分かった。それで頼む」

「開戦は？」

「午後1時で良いだろう。場所はAクラスで頼む」

すらすらと試召戦争の予定が決まってい
日頃からこういった意見ではまとまりやすい二人。

「ああそうだ、雄二。人掃いをたのめるか？少し個人的な話か
しい」

「・・・分かった。」

「翔子に優子、吉井達をあっちの席でもてなしてくれないか？」

「・・・分かった（わ）」

翔子達二人は達也が指差した教室の後ろにあるくつろぎ用のスペースに吉井達を誘導してくれるか、と頼むと快く了承してくれた。

「そんじゃ雄二。俺が話したい事が分かるか？」

Fクラスの生徒を含めた周りに居た生徒が近くから離れたのを確認してからそう切り出した。

「・・・さあな？見当もつかねえよ」

「そうか。なら単刀直入に言おう。朝倉の事だ」

「！」

明らかに聞く気のなさそうな雄二の目が一気に変化し、興味のある事を聞いたそうな目で、俺の顔を見据えていた。

「これで見当はついただろう？さらに言えば、FクラスがDクラス

に試召戦争で勝った日の話だ。」

「……いや、見当なんざついてねえよ」

「……はあ。去り際に俺に取り付けた盗聴機で聞き取った会話を翔子に渡す前の受信機から聞いたはずなんだが……?」

スツと目を細め、僅かに視線をそらす雄二を睨む。

あの日の帰りに翔子から没収した受信機に録音されている音声を聞いたが、俺と朝倉のDクラス内での会話は録音されていなかった。

疑問に思ってた点は、雄二のいたずら（これ決定事項）なんだから、間違いないあの教室での会話を重視して録音しているはずなんだ。だから、後半だけを録音したってのはほぼ有り得ない。

何てったってあの空気だった訳だし、翔子に聞かせて俺が悲惨な目に会う内容だったら教室での会話の方が話される可能性の方が高い訳だから。

それなら何故録音されていなかったのか？ 会話をリアルタイムで聞いていた雄二が消したから。

この疑問にはこの答えが一番しっくりきた。

って事は雄二はあの会話を聞いていたはず。

だから、

「別にお前まで信じるなんて言わない。けどどあいつが前に進むのを躊躇したら背中を押してやってほしい」

「・・・はあ。何を言っても聞く耳無しか。」

「知ってるってのにごまかす奴が言うなよ」

達也の言葉に雄二は、めんどくさそうに頭をかいて、頷いた。

「あゝ、分かったよ。俺の出来る限りの事はするようにする。」

「・・・悪いな」

「しかし、お前が翔子以外を気にかけるなんて珍しいな」

先程の態度とは一変してニヤニヤとした笑みを浮かべて雄二は尋ねてくる。

「失礼な。朝倉に関してはどうも他人とは思えないだけだ。他意はねえよ」

他意なんか無いさ。

うん、他意なんか無い！

そうだ他意なんか無いはずなんだ！！

他意なんか無いと良いなあ

「そ、そんじゃ朝倉の事はちゃんと頼んだからな」

「ああ分かったよ。ああそうそう、賭けをしないか？達也」

雄二は立ち上がるうと片手をリクライニングシートのサイドに載せた所で動きを止めた。

「ん？賭け？」

「ああ。今回の試召戦争での勝ちクラスの代表は、負けクラスの代表に一つ命令が出来る。もちろん、その命令は絶対行使だ。」

「へえ。面白そうだ。分かった、受けて立とう」

「それじゃあ決まりだ」

先程のニヤニヤとした笑みでも今の雄二の笑みは何か悪知恵が働いてる時のものだ。

そんな笑みをしたままりクライニングシートから立ち上がり接待を受けていたFクラスの生徒達と自分のクラスに戻っていった。

・・・決戦は午後1時か。

前例の無い宣戦布告（後書き）

お読みいただきありがとうございます（^人^）

宣戦布告で一話（五千字）使うなんて・・・

文才が無い（泣）

それではまた（^O^）ノシ

そう、これが俺達の戦争だ！（笑）（前書き）

お久しぶりです、たぬくです。

長らくお待たせしてすいませんでした。

これからも月一とかになるかも知れませんが投稿していく予定です。

では、どござ（＾Ｏ＾）ノシ

そう、これが俺達の戦争だ！（笑）

「それではこれよりFクラス対Aクラスの試召戦争を行います。両者準備は良いですか？」

「ああ」

「はい」

俺と雄二、二人の応答を受け、高橋女史がゆっくりと手を挙げ……

Fクラス

V S

Aクラス！！

高橋女史の背後にあった巨大なスクリーンに大きく文字が映し出された。

なんでAクラスだけ「！」が付いているのか？しかも二つも。

……どうやら高橋女史のやる気は充分らしい。

噂じゃあクールビューティとか言われてるけど案外お茶目な方である。

「どうだ雄二？うちの担任のクーデレぶりは。」

「悪くないな。まあ、今日から俺達の担任になるんだ。今のうちに

「ほざいておくといいい」

「やってみろってんだ」

二人してニヤニヤとした笑みで相手を見据える。
客観的に見ればただの痛い奴らである。

「それでは一回戦の4名は前に出て来て下さい」

俺達二人が踵を返して席に座ると入れ違いに両陣営から二人ずつ前にでて……

ガラッ

「雄二、僕はなんでこんな格好で戦わなきゃいけないの!？」

「「「……」」」

「ねえ達也。私達はアレと戦わなきゃいけないの?」

「わ、私は五十嵐様の為なら火の中水の中、どこへでも!！」

音を立ててAクラスの扉が開かれた。

そこから現れたのは、オトナのオトモダチに人気? のセーラー服を着た吉井明久だった。

これは……まずい(イロイロな意味で)

「あ、ああ。気にしないで戦ってくれ!頼むぞ優子に佐藤さん」

振り返った二人に激を飛ばす。確かに陽動作戦としてははっきり言

って効力は高いだろう。無駄に似合いすぎてる気もしない……訳ではないが。

……本当だぞ!?

決して可愛い女の子だなんて思わなかったんだからなっ!!

そ、それより今は

「離してくれ五十嵐君っ！僕は……、僕はっ！！ここで出て行かなかったら一生後悔する！」

いい感じにキャラ崩壊しやがってるこいつをどうにかしないと……

「……仕方ない。久保君、AP5枚だ」

「っ！それでも僕は……」

「7枚」

「もう一押し!!」

「分かった。なら10枚だ」

「……フ。手を引こうじゃないか」

久保は眼鏡を右手の指で押し上げ、席に座りなおす。

吉井が入ってきた時からの力が一気に緩まり、俺はホッと胸を撫で下ろした。

それにしても……

雄二も小癩な手を使う……お陰で今月の終わりに出るゲームを
買って鉄人の主食がまた果物になってしまっじゃないか。いつもで
す。

まったく、久保を姫路に当てないと姫路に勝てるのは、俺か翔子し
か……

……あれ？

むしろ無理に愛子と久保君出さないで俺と翔子が前に出てさっさと
勝負決めちまった方が良かったんじゃないか
なにか今更である。

いやでもほら！——最高クラス（えくくらす）としての誇り（笑）
みたいな、ね？土屋も居るしさ！

とりあえずそういう事にして欲しいらしい。

さて、話は戻すが優子達の試獣戦争である。

「……」

「……お願いだからそんな目で見ないでっ！？僕は雄二に無理矢理
！」

「明久、お前あんなに嬉しそうに着てたじゃないか」

「待て雄二！貴様僕の印象を下げる様な事を！？」

「安心しろ。吉井^{バカ}。お前の評価は下がる事は無い」

「非道いつ!!」

泣きじゃくるように落ち込む明久。

ああ、世の中はなんて非条理なんだろう。

黙れ

「あの、そろそろ始めても?」

「あ、はい。すみま「待つてください。もう少し時間を頂けますか?」……」

俺の答えを遮ったのは、奇しくも優子。あの極悪非道の魔「ギブギブギブっ!!」

「なにすんだよっ!?!」

「変な事考えてたでしょ」

「ソナナコトナイヨ?」

「へえ……。そうなの」

メキメキメシッ

アッ

!!

「秀吉、ちよあつと話があるんだけど来てくれる？」

「いや姉上。彼の事は良いのかの・・・？」

余りにも明久が強烈過ぎたため目には止まらなかったが、明久と共に前に出てきた彼？は
木下秀吉
独特な言葉遣いで肩にかかるくらいの茶髪を縛っている。
何処からどう見ようと美少女、である。

「安心しなさい。達也なら三分したらすぐに治るわ」

「ま、待て優子！俺をそんな人じゃないものと間違えるような事を言うな！」

「いや、彼が人じゃないというのは百も承知じゃが……」

「くそっ！二度目だよこのオチ！！」

閑話休題

「それで秀吉？Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

……コメントは控えよう。なにか今更だ。

とりあえず合掌。アーメン？南無三？どっちでもいいか。

廊下で死体になった木下弟、その代わりに出て来たのは茶髪をポニーテールにした少女　　島田美波だった。
どうしてだろう？

彼女は優子と同じ雰囲気を纏ってる気がする。
もちろん、俺に暴力を奮う優子の……だが。

席に座り、置いてあつたお茶を啜りながらその試合を観戦する。
あつ、このお茶熱いつ！？

結果はAクラス側の優子と佐藤さんの勝利。
当然とは言え、クラスがどつと湧く。

そんなことより、俺は吉井が召喚獣を召喚する前に言っていた言葉が気になっていた。

「なあ吉井。そのネタ……もしかしてオンラインゲームで知ったなんて事……あつたりするか？」

ネタ、とはもちろん。『実は僕

左利きなんだ』のあれである。

「え……？なんでそれを？」

やっぱりそうだ！間違いない！！

観察処分者の宿命とも言えるフィードバックで頬を摩る吉井に聞いた事である考えが確信に変わった。

「あれって知り合いのプレイヤーから聞いた、とか？」

「うん。そうだけど……ってまさか！？劉さんっ！？」

「やっぱりAKIさんだ！」

わいわいと笑顔で喜び合う二人。

客観的に見たら二人とも痛いアホである。

その後、負けたのに喜んでいた吉井明久はお亡くなりました。

『Aクラス 木下優子

WIN 佐藤美穂

VS

Fクラス (木下秀吉)

(DEAD) (吉井明久) LOSE 島田美波』

「では、二試合目の方どつぞ」

「……(スック)」

あちらはムツツリーニ土屋か。なら……

チラリと愛子の方に視線を向けると、一つウインクを見せてから立ち上がった。

「じゃ、ボクが行こうかな。そうそう、一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

そういつて笑顔でFクラスの面々に手を振る愛子。

「教科は何にしますか？」

「……保険体育」

「土屋君だっけ？随分と保険体育が得意みたいだね？でも、ボクだつてかなり得意なんだよ？」

君とは違って、実技で、ね」

愛子の問題発言は今更な気もする。

だから、この心のときめきは気のせいで決して

「……変な事を考えてる頭はこの頭？」

「翔子っ！？やめっ！？ギブギブギブ！？頭がっ！頭がああ！？」

閑話休題

「そっちの君、吉井君だっけ？ 勉強苦手そうだし、保健体育でよ

かつたら僕が教えてあげようか？ もちろん実技で」

「ふっ。望むところ」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんていらなのよ！」

「そうです！ 永遠に必要ありません！」

「そうだそうだ！ 愛子、だったら俺に メシッ」

「……………」

「島田に姫路、それに達也 はいいか。明久が死ぬほど悲しそうな顔をしているんだが」

いや、ちよっ、待っ！？ なんで優子がっ！？ グギヤアッ！？

「……………愛子、そろそろ」

「はい。試験サモン召喚っ」と

「……………試験サモン召喚」

二人を小さくしたような召喚獣が、それぞれ武器を持って現れる。

ムツッリーニ土屋は小太刀の二刀流か。愛子は おお

そういえば愛子の召喚獣をはっきりと見るのは初めての気がする。

Cクラス戦の時は俺の後ろで戦ってくれてたから。

「巨大な斧か」

「何だあの巨大な斧は！？」

達也の呟きとほぼ同時にFクラスの誰かからの声が上がった。

愛子の召喚獣が持つのは体とほぼ大きさが同じ巨大な斧。

あれでバイオナハザードでボスとして出てくるんですね。分かりません。

「それじゃ、バイバイ。ムッツリー二君」

彼女の召喚獣の腕輪が光り輝き、斧に雷光を纏わせながら目で追えないほどの速さでムッツリー二土屋の召喚獣に詰め寄り　　そして、そして剛腕で斧を振るつ。

Aクラスの誰もが勝利を確信し、歓喜の声を上げようと

「……………加速」

した時、ムッツリー二土屋の腕輪が光り輝いた。

「……………え？」

誰が声をあげたのかも分からない。誰もが驚愕していた。

なんで。なんでムッツリー二土屋の召喚獣は愛子の召喚獣の射程距離外に……………？

「……………加速、終了」

そして、ムッツリー二土屋の呟きに数瞬おいて、愛子の召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた。

『Aクラス　工藤愛子

保健体育　446点

VS

Fクラス　土屋康太

572点』

「Bクラス戦では出来がイマイチだったらしいからな」

驚愕の声に包まれるFクラス側からそんな雄二の声が僅かに聞こえた。

「そ、そんな……！ このボクが……！」

愛子のシヨックの声はつきりと耳に入ってくる。

「……………愛子」

「い、ごめん。達也君。負けちゃったよ」

あはは、苦笑いして愛子はこちらに近づいてきた。

「俺はさ……前も言ったけどリーダーって質じゃねえから月並みなことしか言えないけど、愛子。お疲れさん。後は俺たちに任せてくれ」

視線を翔子に向けると翔子は静かに頷いた。

「翔子ちゃん、達也君……。うん、ありがとう。後は頼んだよ！」

苦笑いとは違う笑みを見せた愛子はそれだけ言つと自分の席についた。

「そういえば達也、私たちに労いの言葉は言葉は無いの？」

ふっと一息。

声の方を見れば優子と佐藤さんがこちらを見ていた。

「聞いてる？」

「ああ。聞いてるぞ。お疲れ様、佐藤さん……それと優子」

「あ、ありがとうございます!!」

「フフフフ……」

嬉しそうにほほを緩ませた佐藤さんとは対象に優子は怖い怖い笑みを浮かべていた。

今この時点で関節技をきめられないことに全俺が吃驚した。うん。もしかしてなにか優子に異変が

ミシミシッ

「……………優子？」

「変なこと考えたでしょ？」

「イイエ、ソナナコトハナッ

」

前言撤回。やっぱり優子は優子だった。

☐ Aクラス
1
対
1
Fクラス
☐

そう、これが俺達の戦争だ！（笑）（後書き）

はい、そんな訳で10話です。

最近は東方小説に取り組んでいます。

興味のある方は読んでいただけると嬉しいです。

ハイハイ、宣伝乙

という事で前書きでも書きました通り執筆は続ける予定です。はい。

最後に拙作を待っていてくださった方、更新が遅れて大変すみませんでした。

それでは、また（＾Ｏ＾）ノシ

やっぱりいいじゃないか！とー！（前書き）

昨日投稿しようとして頑張っていたのですがこんな時間になってしまいました（汗）
しかもちょっと短いです。

やっぱりじいじゃねえと!!

「どちらか、教科の選択をお願いします」
「……………」

衆前に立った二人　久保利光と姫路瑞希　は呼びかけにも
応じず無言で向かい合っていた。

なにも個人の勝負の為、教科を決めあぐねているのもあるだろうが、
二人はそれとは違う　もつと重要な事が原因である。

ここで思い返してみよう。一試合目、ツーマンセルで行われたそれは
はAクラス側の教科の指定によって行われ、圧倒的差でAクラスの
勝利で終わった。

二試合目、愛子とムツツリー二こと土屋によって行われたそれはF
クラス側の教科の指定により行われ、皆の理解を追いつかせぬまま
Fクラスの勝利で終わった。

教科指定も勝敗も一対一。残る教科指定は一つである俺達Aクラス
側としたら、あの優子が凄まじいと言う彼J…………彼　葉王に教
科の選択をさせるのは極めて不安だ。

それが分かって久保君は、こうして姫路さんの痺れが切れるのを待
っているのだろう。

雄二が翔子に教科の指定を譲渡する事も考えられるが、それは普通
なら軍の大將が白旗を振ったようなもの。クラスの大半は戦意が下
がるに違いない。ところがギツチョン、あの雄二がそんな顕著に負
けをクラスに認めさせるような行為はしないであろう。

敢えて言わせて貰えば、もしも(…………)久保君が負けた場合に対

しての考察だ。
要するに、久保君が負けなければ良い。

「久保君、後の事は心配しなくて良い。勝て。それだけだ」
「フ。分かったよ。先生、総合科目でお願いします！」
「承認しました。召喚システム起動！」

高橋女史が腕を振るうと同時に、透き通った箱が二人を包んでいく。

『『^{サモン}試験召喚！！』』

勝敗は一瞬で決した。

『Aクラス 久保利光』

総合科目 3997点

VS

Fクラス 姫路瑞希

総合科目 4409点『

『マ、マジか！？』
『いつの間にこんな実力を！？』
『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ………！』

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいるFクラスが」

ざわざわ騒ぎ立つAクラスの中にも響いてくる彼女の言葉。彼女に負けた久保君は頭をこぶ垂れて、地面に膝をついた。

おいおい。やってくれるじゃないか姫路さん。まさかここまで点数を上げて来るなんて……。

ちらりとワイワイと盛り上がるFクラスの面々を視界に捉える。

そこまでFクラスは素晴らしい居場所なのかい？

「追い詰められた……か」

「す、済まない」

「いや、久保君のせいなんかじゃ無いよ。むしろ、姫路さんの成長を把握出来ていなかった俺の」

肩を落とす。

今更気付いた。この二敗がどちらも俺の慢心の責任だって。翔子達の前で『油断するな』なんて言った俺が油断するなんて、どんな皮肉だよ。

嘲笑う。浅はかだった自分を。

その時だった。

「……大丈夫だから」

「……翔子？」

頭に乗せられた手。彼女の手が俺の頭を優しく撫でていた。

「……大丈夫。私達なら絶対勝てる。だから」

そんな悲観しちや駄目。

俺の頭から手を離し、翔子はゆっくりと振り返り、高橋女史の待つクラス中央へ歩き始めた。

その綺麗な黒髪を揺らし、遠くなっていく彼女に俺は視線を釘付けにされた。
頭に手を置く。

考えてる事も、お見通し、か。

口元が緩むのを感じる。

彼女だからなのか、それとも自分を知ってくれていたからなのか。

俺は歩いていく彼女を静かに見つめていた。

「優子ちゃん、コーヒー取りに行かないかな？」

「そうね。私もちょうど飲みたかったところなのよ。」

「僕も同行させてもらうよ。僕も飲みたいんだ。ブラックコーヒー」

「自然にデレるなんて……。流石にボクでも突っ込めなかつたよ」

「あ、愛子。私も砂糖いらないわ。……飲めないけど」

「……………（僕も吉井君と……………）」

「翔子……………」

周りでのコーヒー豆の消費が激しいことにも気づかず、達也は静かに彼の理解者であり想い人の名を呟いていた。

ふわりと彼女の見た目麗しい黒い髪が窓から入ってきた風に流された。

「……………高橋先生」

「分かりました。Fクラスの次の方、出てきてください」

Fクラスの中で頭一つ抜けた赤い髪の少年が立ち上がる。

やはり、雄二か……。

分かっていたものの、俺は葉王か。追い詰められている以上、納得はしたくないが。

「教科はどうしますか？」

残り二試合。Aクラス側に教科指定権は無い。

高橋女史の視線は雄二に向かっていた。

そして、雄二は口を開く。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

その言葉に心が揺れた。

『上限ありだって？』

『しかも小学生レベル。満点確實じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

違う。そうじゃない。雄二は翔子の

「どうしたの達也？ 凄く怖い顔して。らしくない」
「そ、そうか……？」
「そうだね。トラウマに遭ったみたいなの顔してるよ」
「……………」
「「????」」

黙ってしまった達也に、優子と愛子は顔を見合わせる。
その場には既に雄二と翔子の姿は無い。ただ彼らが映るモニターが
眼前で瞬いていた。

『不正行為は即失格になります。いいですね？』

『……………はい』

『では、始めてください』

二人がほぼ同時に問題用紙を表返す。

愛子と優子も達也の視線の先 モニターへと視線を向ける。

| | | |
|-----|-----|--------|
| () | () | 大宝律令 |
| () | () | 平城京に遷都 |
| () | () | 平安京に遷都 |
| () | () | 鎌倉幕府設立 |

何も問題は無い。簡単な問題の数々。そんな中に、それはあった。

() 年 大化の改新

瞬間、Fクラス側がざわつきはじめる。

そして、結果は出た。

『日本史勝負 限定テスト 100点満点』

『Aクラス 霧島翔子 97点』

翔子の点数に、Aクラスのほぼ全員が顔を見合わせた。ところどころから諦めの声も聞こえる。
そして、

『Fクラス 坂本雄二 53点』

それは歓喜の声に変わった。

「良かったあ。翔子ちゃんの点数を見た時は少し負けを意識しちゃったよ」

「そうね。でもあの程度の問題でどうして間違えたのかしら？ 普段の翔子だったら満点でしょうに。坂本が何かしたのかしら？」

「何か知ってる、達也君？」

「あ、ああ、あれは」

告げられていく雄二と翔子の過去。本人達 特に雄二が居たら顔を赤くしてしまうだろうそれに、気づけばFクラスAクラス問わ

ず、皆が耳を傾けていた。

その話には達也の存在は見受けられなかった。どうやら達也も言伝に聞いたものであるらしい。たまたに内容がぼけているものもあった。

「坂本も粹な事をしてくれるわね。翔子の真つ直ぐさを手に取るよ
うな事して……。……。今度秀吉に化けて毒でも盛ろうかしら？」

「……………」

「どうしたの二人とも？ 突然黙って。冗談に決まってるじゃない」
優子が言うと冗談に聞こえないのは何故なんだ？

達也さんのベストアンサー

普段が暴力的過ぎるからでs「イタイイタイギブギブツ!!?」

「まったく……。やっと少し戻ったわね」

「へ？」

「うん。今もまだ酷いけどさっきまでは死んだ魚みたいな顔をして
たんだよ？」

「そ、そうなのかな？」

自分の頬を撫でてみるが、それで分かったなら苦労はしない。

「そうね。私が弄られなきゃならないのは少し釈だけど、今回だ
けは許してあげるわ」

今回だけはを強調する優子。自然と自分の頬が緩むのを感じる。

「でも、朝倉さんに負けたら優子は許すのカナ？」
「あ、愛子？ そういうのは言わない約束だ」
「そうね。負けたら最近の雑誌に書いてあった駅前のアイス屋でも奢って貰おうかしら」

まあ、体罰が無いなら

「それと骨を二・三本と」

「なに！？ 俺は悪魔とでも契約するの！？」

「私が悪魔だつて？」

「イイエ。ソナナコト申して無いでござる」

そういえば、学年が上がってからずっとこんな漫才をしてた気がする。

今更じゃん。なんて笑われるかもしれない。だけど、それを思い出さないくらい、このAクラスでの毎日は充実していたんだ。

だから守ろう。この日常を。戦おう。守るために。俺はまだ、戦える！

T o b e c o n t i n u e d

なんて心の内で考えてみたり。うわー、無いわw

だけど、こんな日常が楽しい。これは本当だ。

そんな日常。例えばピースが一つ欠けたとしても、失くなって欲しくは無いや。

「……達也」

背後から声が聞こえた。足音も僅かにだが確実に大きくなってくる。

「……翔子か？ 戻って来てたんだな。お疲れ様」

「……うん。頑張った」

「ああ」

「行つてきなさい」

「頑張ってたね」

「へへッ。Aクラス、遠藤達也。行つてしまっす！！」

翔子に続いて、側に居た二人からも見送られながら俺は席を立ち、一歩前へと踏み出した。

☐ AクラスVS Fクラス

2 対

2 ☐

せっぱいじいじやねえとー！（後書き）

はっきり言うと少し達也の気持ちは半透明になるように書きました。
詳しくはのちのち書いていくつもりです。

それではまた（＾o＾）ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9602s/>

バカとテストと召喚獣 ~異常者と転生者と?~

2011年10月29日04時14分発行